

平成29年度

郡山市中學生長崎派遣事業

「2017 ナガサキへのメッセージ」 報告書



郡山市・平和を考える市民の集い実行委員会

平成29年度郡山市中學生長崎派遣事業

「2017 ナガサキへのメッセージ」報告書に寄せて



郡山市長 品川 萬里

1945年8月、広島そして長崎に原子爆弾が投下されました。熱線と爆風によって街は一瞬にして焦土と化し、数多くの尊い命が奪われ、生き残った多くの方々も心と体に大きな傷を負い、今もなお後遺症に苦しんでおられます。

郡山市におきましても、4度にわたる空襲により大きな被害を受け、500名を超える尊い命が犠牲となりました。

あの悲惨な戦争の終結から72年が経ちました。私たちは今、平和な日常を過ごしております。しかし、今日の平和が、先の大戦の大きな犠牲の上に築かれたものであることを決して忘れてはなりません。被爆者の平均年齢が81歳を超え、被爆者が減少していく中で、核兵器使用により引き起こされたあの悲惨な出来事を二度と繰り返すことなく、その廃絶の必要性を次の世代に伝えていくことは、今の平和な時代に生きる私たちの使命であります。

そのための取り組みとして、「核兵器廃絶都市」を宣言している本市では、「平和を考える市民の集い実行委員会」との共催により、次代を担う中学生を被爆地へ派遣する事業を平成8年度から実施しております。今年も、市内各中学校の代表生徒に役員を加えた派遣団33名を長崎市へ派遣いたしました。

派遣された中学生の皆さんは、平和公園や原爆資料館の見学、平和祈念式典への参列をはじめ、青少年ピースフォーラムでの被爆体験講話や平和学習、交流会などへの参加を通して、原子爆弾の悲惨さや恐ろしさ、被爆者の方々の想いを伝えていくことの大切さなど、たくさんのことを学んだことと思います。また、全国から集まった同世代の青少年と、平和な世界の実現のために意見を交わすとともに、交流を深めることができたことと思います。中学生の皆さんには、被爆地長崎で学んだことや被爆者の方から伺ったお話を、家族や友人などできるだけ多くの方々に話し、平和の大切さを伝えていただきたいと思っております。

この報告書には、長崎市での4日間の研修によって派遣された中学2年生29名が平和の尊さや核兵器廃絶の必要性について学んだこと、感じたことがそれぞれの言葉でまとめられています。この報告書が一人でも多くの方々に読まれることを願うとともに、平和について考えるきっかけとしていただければ幸いです。

長崎市の皆様には、本市派遣団を今年も温かく迎え入れていただき、厚く御礼を申し上げます。また、長崎平和宣言に込められた「福島を応援します」とのメッセージに、大変勇気づけられるとともに、復興への歩みを一段と進めるべく改めて思いを強くしたところでもあります。

結びに、本事業の実施に当たり多大なる御支援、御協力をいただきました関係者の方々に心から感謝を申し上げまして、挨拶といたします。

平成29年度郡山市中學生長崎派遣事業

「2017 ナガサキへのメッセージ」報告書に寄せて



郡山市教育委員会教育長 小野 義明

市内各中学校から1名ずつ選出された皆さんは、平成29年度郡山市中學生長崎派遣団員として、平成29年8月7日から4日間長崎市を訪れました。長崎市長に「平和へのメッセージ」を伝える役割を担った皆さんは、その重要な役割を果たす中で平和の尊さを強く認識されたことと思います。また、厳粛な雰囲気のある式典への参加や様々な場所の見学、長崎の人はもちろん、全国から集まった人々との交流を通して、貴重な時間を過ごすことができたことは、とても意義深いことであると感じています。

72年前の8月9日、長崎に投下された原子爆弾によって、幾万の尊い命が失われ、生き残った被爆者も、癒えることのない傷を負ったまま、今もなお、原爆による後遺症や健康への強い不安に苦しみ続けているといわれております。

そのような中、東日本大震災及び福島第一原子力発電所の事故を経験し、一步一步復興の歩を進めている地で生活している中学生の皆さんが、実際に長崎を訪れ、長崎の人々が歩んできた長い復興の道のりに触れることができたことは、大変貴重な体験であったことと思います。互いに助け合い、励まし合い、一致団結して多くの困難を乗り越え街の復興に向けて力強く歩んできた姿に、参加した中学生の皆さんは、大きな感動と勇気を得ることができたものと思っております。

さて、この報告書は、派遣団の皆さんが、今回の派遣を通して実際に感じ取ったことを、平和へのメッセージとしてまとめたものです。どのページを見ても、皆さんの若い感性でとらえた平和への思いが、率直な言葉でつづられていました。

表現の違いこそあれ、参加した皆さん全員が、戦争や核兵器を使う愚かさや、平和の大切さに触れるとともに、「未来の平和」のために自分自身ができることを強い決意として述べられており、大きな感動を覚えました。

どうか、派遣団の皆さんには、この体験で感じた想いを多くの友人に語り伝えるとともに、人類の未来を壊さないために、持てる限りの「英知」を結集していただきたいと思っております。同時に、この報告書が一人でも多くの皆様に読まれることを切に願っております。

結びに、無事に本事業の目的を達成され、立派な報告書を完成させた中学生の皆さんと、派遣に御尽力いただいた関係者の皆様をはじめ、御協力をいただいた保護者の皆様に心より感謝申し上げます。また、本市の中学生を温かく受け入れ、全世界に向けた長崎平和宣言の中で「福島原発事故から6年が経ちました。長崎は放射能の脅威を経験したまちとして、福島の被災者に寄り添い、応援します」というメッセージを発信していただいた長崎市長をはじめ、長崎市の皆様の益々の御発展を御祈念申し上げ、挨拶といたします。

目 次

【事業内容】

ナガサキへのメッセージ	1
事業概要	2
派遣団名簿	4
行程表	6

【研修風景】

集合写真	7
写真で綴る研修風景	8

【団員報告】

桑名	葵	日和田中学校	12
齋藤寛	高行	健中学校	14
橋本裕	明健	中学校	16
鎌田彩	花安	積中学校	18
熊坂遥	介安	積第二中学校	20
佐藤史	織三	穂田中学校	22
遠藤颯	人逢	瀬中学校	24
高橋采	那片	平中学校	26
佐藤良	則喜	久田中学校	28
瀧田怜	菜熱	海中学校	30
高橋伸	太朗	湖南中学校	32
草野奈	月守	山中学校	34
松本直	樹高	瀬中学校	36
遠藤聖	奈二	瀬中学校	38
鏡真	之介	郡山第一中学校	40
堀田不	同	郡山第二中学校	42
丹野粹	誠	郡山第三中学校	44
本田彩	乃	郡山第四中学校	46
吉田龍	之介	郡山第五中学校	48
菅野彩	花	郡山第六中学校	50
有沼優	汰	郡山第七中学校	52
高中橋由	奈	緑ヶ丘中学校	54
中樽島英	大	富田中学校	56
佐川瑳	李	大槻中学校	58
伊藤悠	悠	小原田中学校	60
伊藤菜	緒	西田中学校	62
伊藤碧	人	宮城中学校	64
渡邊知	紗	御館中学校	66
石川琳	久	郡山ザベリオ学園中学校	68

§ 事業内容 §

戦後72年を迎え、原子爆弾により亡くなられた多くの方々に心から哀悼の意を捧げます。

貴市におかれましては、市民の皆様のため御努力により、原子爆弾による凄絶な被害を乗り越えられ、今日の発展を築かれました。

また、平和に対する揺るぎない意志のもと、世界の先頭に立ち、日本国内さらには全世界に対して自らが受けた惨状を伝え、そして「核兵器のない世界」の実現を訴え、行動を続けておられますことに、心から敬意を表します。

終戦から72年が経過し、戦争や原子爆弾の恐ろしさを直接経験された方々が少なくなっており、国民の多くが戦争を知らない世代となりつつある中で、戦争や被爆の記憶を次の世代にどう受け継いでいくのかが課題となっております。

本市では、今日の平和が、多くの方々の犠牲の上に築かれたかけがえのないものであることを、次の世代に伝えていく責務があるとの思いから、次代を担う中学生を貴市に派遣し、「平和の尊さ」や「核兵器使用の悲惨さとその廃絶の必要性」を深く理解するとともに、全国から集まる同世代の仲間たちとの交流を図ることを目的として様々な研修活動を実施いたします。

この貴重な体験を通して、参加者一人ひとりが「核兵器廃絶のために必要なこと」や「平和のために自らができること」をそれぞれ学び感じ取り、同世代の青少年をはじめ、多くの人々に伝えてくれるものと期待しております。

本市におきましては、東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所の事故という未曾有の災害により大きな影響を受けましたが、貴市をはじめ数多くの皆様から賜りました温かい御支援を励みに、市民生活の「日常の平和」を取り戻すため、全市を挙げて復興に向け着実に邁進しているところであります。

長崎市民の皆様にも、是非、本市へおいでいただき、新たな未来へと歩みを進めている姿を感じていただけたら幸いです。

結びに、「核兵器廃絶」と「世界の恒久平和」の実現を強く念願いたしますとともに、貴市のますますの御発展並びに長崎市民の皆様のお活躍と御多幸を心から御祈念申し上げます。

平成29年8月9日

長崎市長 田上富久様

郡山市長 品川 萬里

平成29年度郡山市中學生長崎派遣事業 「2017 ナガサキへのメッセージ」 事業概要

1 趣旨

市民の多くが戦争を知らない世代となりつつある中で、今日の平和が、先の大戦の大きな犠牲の上に築かれたかけがえのないものであることを忘れてはならない。

これを次代に伝えるのが今日に生きる私達の使命であると考え、「核兵器廃絶都市」を宣言している本市における平和への取り組みとして、平和の尊さや核兵器使用の悲惨さとその廃絶の必要性を認識してもらうことを目的に、感受性豊かな中学2年生を被爆地である長崎市へ派遣し、研修活動を実施する。

また、報告書の作成・配布や、報告会及びパネル展の開催を通して、本市の取り組みについて広く市民への周知を図る。

2 主催

郡山市／平和を考える市民の集い実行委員会

3 事業内容

(1) 結団式及び事前学習会

- ア 開催日 平成29年7月26日（水）
- イ 会場 郡山市役所本庁舎2階 特別会議室
- ウ 内容 「平和へのメッセージ」付託、団員証交付、団長及び団員代表あいさつ、オリエンテーション

(2) 派遣研修

- ア 派遣先 長崎県長崎市
- イ 派遣人員 団員29名、役員4名（団長、副団長、支援者、事務局各1名）
- ウ 派遣期間 平成29年8月7日（月）～10日（木）
- エ 研修内容
 - ・永井隆記念館（如己堂）見学（8月7日）
 - ・平和公園及び長崎原爆資料館見学（8月8日）
 - ・「平和へのメッセージ」伝達（8月8日）

- ・青少年ピースフォーラム（平和学習、交流会）参加（8月8日～9日）
- ・長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参列（8月9日）

(3) 報告書

派遣団員による研修の成果をまとめた、「平成29年度郡山市中學生長崎派遣事業「2017 ナガサキへのメッセージ」報告書」の作成、配布

(4) 報告会

ア 開催日 平成29年11月25日（土）

イ 会場 郡山市役所本庁舎2階 特別会議室

ウ 内容

- ・被爆体験伝承者による講話（長崎市被爆体験家族証言・交流証言者）
- ・派遣団員による研修報告

(5) 写真パネル展・原爆パネル展

派遣研修で派遣団員が自ら撮影した写真に平和へのメッセージを添えて展示する「写真パネル展」及び原爆に関する資料を展示する「原爆パネル展」の開催

ア 1回目

- ・期間 平成29年11月24日（金）～12月8日（金）
- ・会場 郡山市役所本庁舎1階 市民ギャラリー

イ 2回目（予定）

- ・期間 平成30年2月1日（木）～2月14日（水）
- ・会場 郡山市中央図書館 エントランスホール

(6) 中学校へのパネル貸出

展示希望のある市内中学校への写真パネル及び原爆ポスターの貸出し

平成29年度 郡山市中學生長崎派遣団名簿

役 員

役 職 名	氏 名	性別	所 属
団 長	吉 村 隆 <small>よしむら たかし</small>	男	郡山市総務部総務法務課長
副 団 長	桑 名 博 子 <small>くわな ひろこ</small>	女	平和を考える市民の集い実行委員会監事
支 援 者	佐 藤 哲 也 <small>さとう てつや</small>	男	郡山市立郡山第二中学校教諭
事 務 局	杉 原 達 彦 <small>すぎはら たつひこ</small>	男	郡山市総務部総務法務課総務管理係主査

団 員

番 号	学 校 名	氏 名	性 別
1	日 和 田 中 学 校	桑 名 葵	女
2	行 健 中 学 校	齋 藤 寛 高	男
3	明 健 中 学 校	橋 本 裕	男
4	安 積 中 学 校	鎌 田 彩 花	女
5	安 積 第 二 中 学 校	熊 坂 遥 介	男
6	三 穂 田 中 学 校	佐 藤 史 織	女
7	逢 瀬 中 学 校	遠 藤 颯 人	男
8	片 平 中 学 校	髙 橋 菜 那	女
9	喜 久 田 中 学 校	佐 藤 良 則	男
10	熱 海 中 学 校	瀧 田 怜 菜	女
11	湖 南 中 学 校	髙 橋 伸 太 朗	男
12	守 山 中 学 校	草 野 奈 月	女
13	高 瀬 中 学 校	松 本 直 樹	男
14	二 瀬 中 学 校	遠 藤 聖 奈	女
15	郡 山 第 一 中 学 校	鏡 眞 之 介	男
16	郡 山 第 二 中 学 校	堀 田 木 同	女
17	郡 山 第 三 中 学 校	丹 野 粹 誠	男
18	郡 山 第 四 中 学 校	本 田 彩 乃	女
19	郡 山 第 五 中 学 校	吉 田 龍 之 介	男
20	郡 山 第 六 中 学 校	菅 野 彩 花	女
21	郡 山 第 七 中 学 校	有 沼 優 汰	男
22	緑 ケ 丘 中 学 校	髙 橋 由 奈	女
23	富 田 中 学 校	中 島 英 大	男
24	大 槻 中 学 校	樽 川 瑳 李	女
25	小 原 田 中 学 校	佐 藤 悠	男
26	西 田 中 学 校	伊 藤 菜 緒	女
27	宮 城 中 学 校	伊 藤 碧 人	男
28	御 館 中 学 校	渡 邊 知 紗	女
29	郡 山 ザ ベ リ オ 学 園 中 学 校	石 川 琳 久	男

「2017 ナガサキへのメッセージ」行程表

8月7日 (月)

5:50集合	-----	6:00	6:10	<u>バス</u>	7:00	8:05	<u>飛行機</u>	9:15	10:25
郡山市役所		出発式			福島空港		ANA1696	伊丹空港	
	<u>飛行機</u>	11:50	12:10	<u>バス</u>	12:50		14:20	<u>バス</u>	
	ANA3155	福岡空港			昼食・太宰府天満宮				
16:30		17:00	<u>バス</u>	17:30	-----	18:30	20:00	-----	22:00
永井隆記念館 (如己堂)		宿舎		夕食・ミーティング		就寝			

8月8日 (火)

7:00	-----	7:30	9:30	<u>バス</u>	10:00	-----			
起床		朝食	宿舎		平和公園・原爆資料館				
	12:00	-----	12:20	13:10	-----	14:00	17:20	<u>バス</u>	
市長メッセージ伝達		昼食		青少年ピースフォーラム1日目 (平和会館)					
18:00		19:30	<u>バス</u>	19:45	-----	20:30	21:15	-----	23:00
青少年ピースフォーラム交流会 (長崎新聞文化ホール)		宿舎		夕食・ミーティング		就寝			

8月9日 (水)

7:00	-----	7:15	8:30	<u>バス</u>	9:30	11:50	-----
起床		朝食	宿舎		平和祈念式典 (平和公園/長崎ブリックホール)		
12:20	13:00	-----	13:30	15:30	<u>バス</u>	16:00	18:00
昼食		青少年ピースフォーラム2日目 (平和会館)				大浦天主堂・グラバー園	
<u>バス</u>	18:30	-----	19:00	20:30	-----	22:00	
	宿舎		夕食・ミーティング			就寝	

8月10日 (木)

6:30	-----	7:00	8:00	<u>バス</u>	8:15	10:00		
起床		朝食	宿舎		浦上天主堂・一本柱鳥居・出島 (史料館)			
<u>バス</u>	11:00	12:20	<u>飛行機 (昼食)</u>	13:30	15:45	<u>飛行機</u>	16:50	17:20
	長崎空港		JAL2374	伊丹空港		ANA3179	福島空港	
<u>バス</u>	18:30到着	-----	18:40	18:50				
	郡山市役所		解散式					

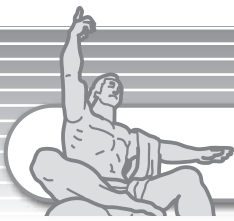
(路線表示) 飛行機 バス 徒歩 -----

【宿泊先】 長崎にっしょうかん (所在地: 長崎県長崎市西坂町20-1)

§ 研 修 風 景 §



「平和の泉」にて



写真で綴る長崎研修風景 ①



①8月7日午前6時、郡山市役所で出発式。4日間の研修が始まります。これから長崎へ向け出発です。



②台風の影響もありましたが、無事福岡に到着。太宰府天満宮を参拝し、研修中の安全と学業成就を祈願しました。



③長崎市に到着、永井隆記念館（如己堂）を見学しました。永井博士の活動の記録や平和に対する想いを学びました。



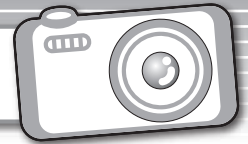
④2日目。ボランティアガイドの方々の案内で、平和公園にある被爆遺構や祈念碑を巡りました。



⑤長崎原爆資料館。当時の被害の大きさと現在の核兵器の実相についてのガイドの方々の説明に、真剣に耳を傾けました。



⑥郡山市長から託された「平和へのメッセージ」を、派遣団の代表が長崎原爆資料館長へ届けました。



⑦爆心地公園にて。高瀬中学校の松本君が、学校から託された千羽鶴を奉納しました。



⑧原子爆弾落下中心地碑。みんなで黙とうを捧げ、原子爆弾による犠牲者の方々のご冥福を祈りました。



⑨青少年ピースフォーラム1日目。被爆者の深堀讓治さんによる講話を聴き、原子爆弾の恐ろしさを改めて知りました。



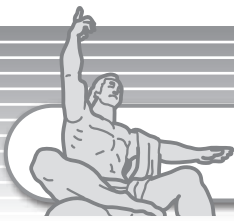
⑩ピースボランティアの方々の案内で、平和会館周辺の祈念碑などを巡るフィールドワークを行いました。



⑪交流会では、全国から集まった同世代の生徒たちやピースボランティアの方々と食事をしながら、交流を深めました。



⑫3日目。平和祈念式典。多数の参列者の方々と黙とうを捧げました。本会場である平和公園では、7名の団員が参列しました。



写真で綴る長崎研修風景 ②



⑬中継会場である長崎ブリックホールでは、22名の団員が参列しました。本会場では実施されない詩の朗読やハンドベルの演奏を聴きました。



⑭平和祈念式典の後、平和祈念像を見学しました。雨模様でしたが、その雄大な姿に込められた平和への想いを知りました。



⑮青少年ピースフォーラム2日目。班ごとに自分たちの考える平和について話し合い、自分自身ができることについて発表しました。



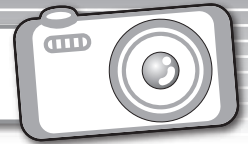
⑯2日間の青少年ピースフォーラムが終了。最後に、参加者全員で記念撮影を行いました。



⑰吉村団長から、一人ひとりに対し、青少年ピースフォーラムの修了証が手渡されました。



⑱3日目夕食後のミーティング。研修も残り1日。支援者として同行した佐藤哲也先生から、充実した研修にするための心構えについてご指導がありました。



⑱4日目。江戸時代に日本の貿易の窓口となった、出島を見学しました。



⑳無事郡山に到着し、4日間の研修が終わりました。仲良かった仲間との別れを惜しみつつ、最後の写真撮影です。



㉑1班団員(左から) 伊藤碧人、佐藤良則、齋藤寛高、高橋伸太朗、有沼優汰(班長)、高橋由奈、瀧田怜菜、菅野彩花



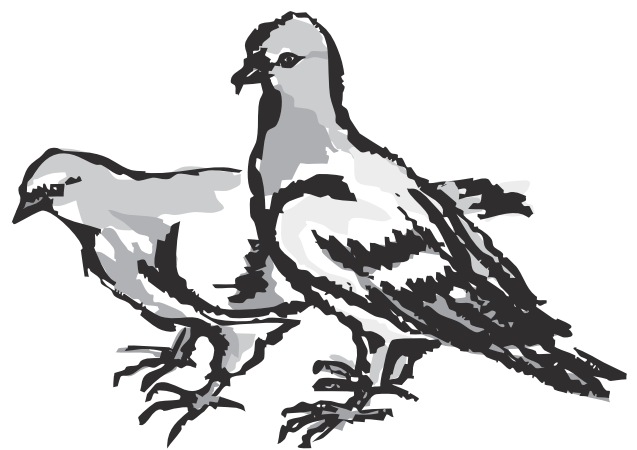
㉒2班団員(左から) 橋本裕、石川琳久、丹野粹誠、草野奈月、伊藤菜緒、佐藤史織(班長)、鎌田彩花



㉓3班団員(左から) 中島英大(班長)、鏡真之介、松本直樹、佐藤悠、遠藤聖奈、樽川瑤李、桑名葵



㉔4班団員(左から) 高橋采那(班長)、堀田不同、渡邊知紗、本田彩乃、熊坂遥介、遠藤颯人、吉田龍之介



§ 團 員 報 告 §



被爆者の思いを伝えていく決意



郡山市立日和田中学校2年 桑 名 葵

1 はじめに

「長崎」といえば、カステラにちゃんぽん、ハウステンボス。また、学校の授業で、16世紀後半から始まった南蛮貿易や、江戸時代の出島での貿易を学んだので、私は、古くから外国との交流が盛んな、とても活気のある都市という印象を持っていた。1945年8月9日に原子爆弾が投下され、多くの命を失った町だが、現在の長崎は、戦後復興をなしとげて活気を取り戻しているのだと思っていた。

しかし、昨年の学校の文化祭で、長崎派遣に参加した先輩の報告を聞いて、原子爆弾の恐ろしさや、今も被爆によって苦しんでいる人がたくさんいらっしゃることを知った。その時、私は、戦後70年以上経っても人々を苦しめる核兵器やそれによる被害の状況などを、自分の目で見て、耳で聞いて学んできたいと思い、この研修への参加を希望した。実際に長崎に行ってみると、原爆によって破壊された建物や戦争に関する資料を見たり、被爆者から話を聴いたりすることができ、教科書だけではわからなかった多くのことを学ぶことができた。

2 研修の実際

(1) 永井隆記念館

医師である永井隆博士は、自らも被爆し、白血病に侵されながらも、負傷者の救護にあたった。寝たきりになってから住んだ2畳ひと間の「如己堂」の如己とは、“汝の近き者を己の如く愛すべし”という聖書の言葉だ。博士の言葉に「平和は愛の力で簡単に」というものがある。私は、この記念館を訪れて、平和とは、一人ひとりが家族や友達など自分のすぐ近くにいる人

を大切にすることから始まって、広まっていくものなのだと思います。

(2) 原爆資料館

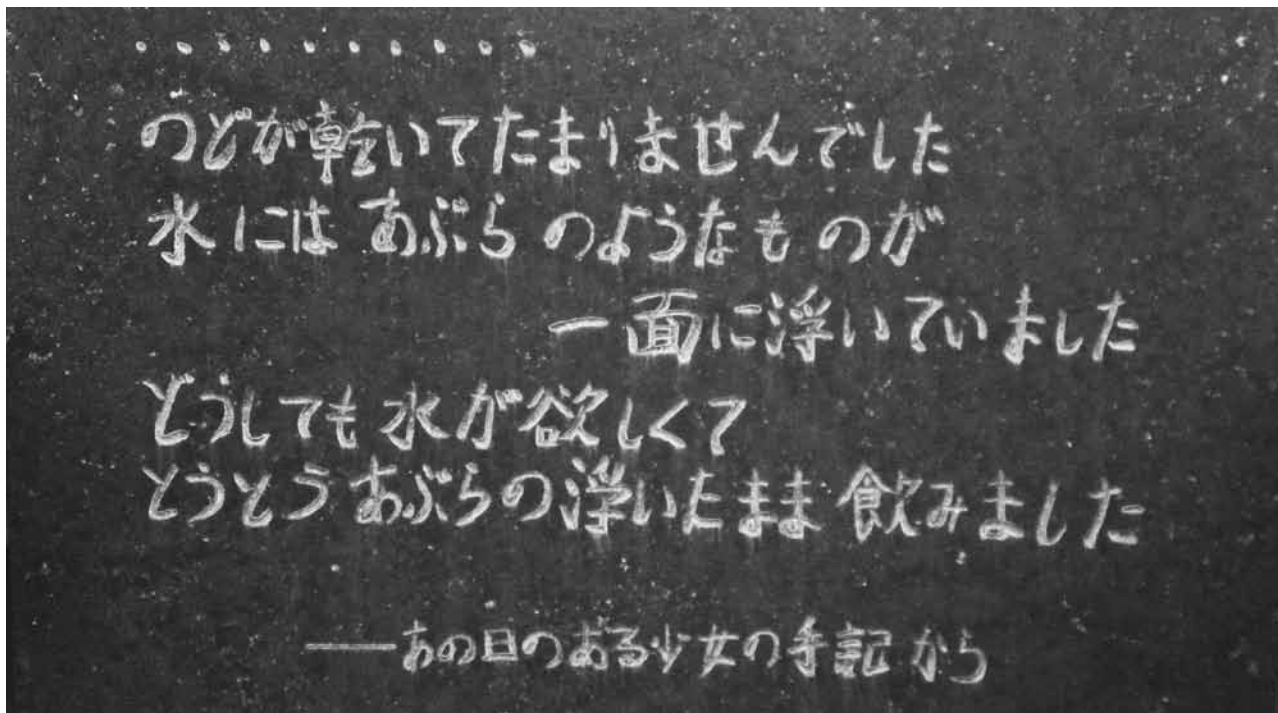
この資料館に入るとすぐに、長崎に原爆が投下される前と後の写真が、白黒で展示されていた。同じ町とは思えない写真だった。また、展示してあった原子爆弾「ファットマン」の周りには、熱線で溶けた瓶や焦げた弁当箱、ぼろぼろの服、焼けただれた顔や多くの遺体の写真があり、見るのがとても辛かった。一発の原爆が一瞬にして人々の日常を奪ってしまったことに、核兵器の恐ろしさを改めて感じた。

(3) 長崎原爆死没者追悼平和祈念館

この研修で見た多くの資料の中でも、この平和祈念館の中にある原爆死没者名簿が心に残った。この名簿は、いつもはこの平和祈念館にあるが、平和祈念式典の時には平和の像の前に奉安される。今年は4冊増えて178冊、計17万5743人の名前が記されている。毎年増えるということは、今も原爆が原因で亡くなる方がいらっしゃることで、そして、名簿のうちの1冊は、今なお身元がわからない、行方がわからない方々のための、何も記されていない真っ白な名簿であることを知り、戦争による悲しみは今も続いているのだと思った。

(4) 青少年ピースフォーラム

このフォーラムでは、様々な研修を行った。被爆者の貴重な話を聴いたり、ピースボランティアの方々と一緒にフィールドワークを行ったりした。また、全国から集まった同世代の人達と“幸せ”や“平和”について意見交換をした。最後に、“マイ平和宣言”や“平和の地球儀”を作り上げた。私は、このフォーラムを運営している人達が、自分とあまり歳が違わないこと



< 平和の泉 >

にも驚いた。高校生や大学生が力を合わせて戦争を伝え、平和を築いていこうとする姿にとても感動した。

3 心に残った風景

私がこの研修で一番心に残ったのは、深堀讓治さんによる被爆体験講話だ。深堀さんは、母親と弟二人、妹一人を亡くされていた。まだ息があった弟は、「水を、水を」と言っていたが、井戸は死体の山となっており、水を飲ませてあげることができなかつたそうだ。深堀さんの話の中で、「被爆者がどれだけ詳しく話しても、伝えきれないことがある。それは“熱さ”と“臭い”。原爆の熱線の熱さと死体の臭い、焼け焦げた臭いだけは伝えることができない。」とおっしゃっていたのが忘れられない。私はこの話を聴いた時、講話会場に行く前に訪れた平和公園にある「平和の泉」の石碑の「のどが乾いてたまりませんでした どうしても水が欲しくてあぶらの浮いたまま飲みました」という文字を思い出した。どんなに熱かったことか、どんなに辛かったことか、想像してもしきれなかつたのが辛かった。だから、私は、平和祈念式典での11時2分の黙祷の時はもちろんだったが、「献水」の時に、特に深く強く、犠牲者の方々へのご冥福をお祈りした。

4 研修を振り返って

81歳。現在の被爆者の平均年齢だ。「被爆者のいる時代」の終わりが近づいていると、長崎市長がおっしゃっていた。また市長は、今年の平和宣言の中で、「人はあまりにもつらく苦しい体験をしたとき、その記憶を封印し、語ろうとはしません。語るためには思い出さなければならぬからです。それでも被爆者が、心と体の痛みを耐えながら経験を語ってくれるのは、人類の一員として、わたしたちの未来を守るために、懸命に伝えようと決意しているからです。」と述べられた。私はこの宣言を聞いて、深堀さんの決意を大切にしていこう、そしていつか「被爆者がいない時代」になっても、長崎で学んだことを、多くの人に伝えていこうと決意した。

また、戦後の長崎の復興は、長崎市民の方々のご努力はもちろん、今回お世話になった被爆者や学生のピースボランティアの方々が、たくさんのお通しを多くの人々に平和の大切さを伝える活動をされており、それらの上に築かれているものなのだと思えることができた。

世界平和を考えて



郡山市立行健中学校2年 齋藤寛高

1 はじめに

今年には戦後72年目だ。テレビなどで戦争関連の内容が放送される中、ある番組で原子爆弾を特集していたものがあり、私はそれを見ていくうちに、少しずつ原爆が落とされたナガサキに興味を持つようになった。原爆について調べていくうちに、ナガサキでどのような事が起き、どのくらい悲惨な事が起きたのかを知り、胸が痛くなった。

そんな中、先生から長崎派遣の話を受け、私は原爆の恐ろしさや平和の大切さを知りたいと思い、参加を決意した。

2 研修の実際

私はこの派遣で初めて長崎に行った。長崎の町は72年前に原爆が落とされたとは思えないほど、とても活気がありきれいだ。

(1) 永井隆記念館・如己堂

そこには永井博士にまつわるたくさんの資料が展示されていた。永井博士は原爆が落とされた時、自分自身も被爆しているにもかかわらず、負傷した人々の救護活動を行った偉大な人である。記念館にはたくさんの資料があり、中には目を背けたくなるようなものもあった。永井博士は白血病と診断され、余命3年となってしまった。そんな中博士は、戦争の悲惨さを伝える為たくさんの本を執筆した。

永井博士の思想であった「己の如く隣人を愛せよ。」という言葉は、博士が生きる理由だったと私は思う。

(2) 平和祈念式典（長崎ブリックホール）

私は長崎市長の平和宣言や被爆者の方の平和への誓いを聴いて、改めて戦争は二度と起こし

てはいけないと思った。11時2分に黙とうを捧げた時、私は心の中でこれからもずっと平和であってほしいと本当に思った。

(3) 青少年ピースフォーラム

2日間に渡って行われたピースフォーラムでは、全国から集まった仲間たちと共に平和への意見を交換しあった。

1日目は、被爆者の方の話や戦争についての紙芝居を聴くことができた。被爆者の方の話では、原爆が投下された瞬間に閃光が目に入ってきた等の当時の様子を細かく聞くことができた。紙芝居では、ある女学生の桜の木の話を聞き、原爆はすべてのものを一瞬にして破壊してしまう事や人の命を簡単に奪ってしまう事を知った。

2日目は、現在の平和について考えた。今の世界には約14,900個の原子爆弾があると聞き、驚きを隠せなかった。また、平和の実現のためには一人ひとりが平和への意識をしっかりと持って生きていく事が大事だと感じた。



＜ 原爆犠牲者の冥福を祈る平和祈念像 ＞

3 心に残った風景

私が心に一番残った風景は、この平和祈念像である。この像には人々の平和への想いがたくさん込められていて、空高くのぼされた右手は「原爆の脅威」を、水平にのぼされた左手は「平和」を、曲がった右足は「原爆投下後のナガサキの静けさ」を、立てた左足は「救った命」を、軽く閉じた目は「原爆犠牲者の冥福」を祈っているという。

私は、この像を初めて見た時、何か胸に響くものがあった。特にその表情である。その顔を見た時、この祈念像の優しさに包まれるかのような気持ちになった。ふと、原爆投下時のことを考えてみた。家屋は跡形もなくなり人々がうめき苦しんでいる姿を想像するだけで胸が締め付けられ、やりきれない気持ちになった。

戦争は起きてはいけない、そして起こしてはいけないと思う。そのためには私たちが世界中にこのナガサキで起きた事を発信していかなければならない。そのために、この平和祈念像はとても大事な役割を担っていると私は感じた。

4 研修を振り返って

この長崎派遣を通じて私は、今の平和が当たり前ではないこと、そして戦争は二度と起こしてはならないことを知ることができた。戦争が起きることによってたくさんの方が亡くなったり怪我をしたりすることがこれ以上あってはならないと、私は思う。今回の派遣でたくさんの貴重な話を聞くことができ、私は周りの人たちにナガサキで起きた悲惨な戦争のことを伝えていかなければならないと、決意を新たにすることができた。

平和の発信



郡山市立明健中学校2年 橋本 裕

1 はじめに

この夏、国連本会議にて、核兵器禁止条約が採決された。しかし、核の傘の中にいる日本は採決を棄権した。私のいる福島は原発事故の被害を、長崎は原子爆弾の被害を受けた。今後、福島が復興していくうえで、過去の真実を知らなければならない。その第一歩として、この研修に参加することに決めた。

2 研修の実際

現在の長崎はとても活気のある街だ。きれいな海と山があり、72年前に原子爆弾が投下された事実はとても信じがたい。

(1) 如己堂・永井隆記念館

如己堂・永井隆記念館は、43歳という若さで亡くなった永井隆博士の生きた証が、展示してあった。

永井博士は、放射線を浴び続けたことにより白血病を患って、余命3年と宣告された。長崎に原子爆弾が投下されたときは、自身に大けがを負いながらも、負傷した人々の救護活動にあたった。太平洋戦争が終わると如己堂という2畳の家に住んだ。如己堂の「如己」とは、聖書の一節である「如己愛人」という言葉が由来である。「己の如く隣人を愛せよ」という意味である。亡くなるまでの間、この如己堂で「長崎の鐘」、「この子を残して」など、執筆活動を続けた。永井博士は、この小さな建物から、「核兵器は二度と使ってはいけない、戦争をしてはいけない」という願いを、命を懸けて世界に発信したのだ。その願いは、今も伝え続けられている。私は、永井博士のように命を懸けて人のために尽くすことは、真似することができない。

しかし、少しでも平和な世界になるために、平和の大切さを発信していきたいと思った。

(2) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館には、原子爆弾が落とされる前、原子爆弾が落とされた直後、復興の過程、そして、現代の核兵器の展示がしてある。特に印象に残ったのは、女性の足元に遺体がある写真だ。長崎の街は一瞬にして焦土と化し、人々は生活の営みを奪われた。原爆は凄まじい威力を持っていることを改めて感じた。

また、長崎に投下された原子爆弾「ファットマン」の模型が展示されていた。ファットマンは、私よりも何周りも大きくて、とても驚き、この一発で長崎の街、人々が消えてしまったと思うと、ショックを受け言葉も出なかった。

しかし、現代にも核兵器が存在し、また日本は、核兵器の脅威にさらされている。現代こそ、唯一の原子爆弾の被爆国日本が、平和の大切さを世界に向けて発信する必要があるのではないだろうか。

(3) 平和祈念式典（長崎ブリックホールにて）

8月9日に行われた平和祈念式典は、長崎ブリックホールにての参列となった。式典では長崎市長の平和宣言や安倍総理をはじめとする来賓の方々の式辞が述べられた。また、核兵器禁止条約の採決が行われた国連から、事務次長である中満泉氏が参列した。11時2分になると、平和の鐘が鳴らされる中、黙祷を捧げた。その中で私は、世界からすべての核兵器が無くなり、いち早く平和な世界が訪れるようにと祈った。

被爆者の平均年齢は80歳を超え、参列できる被爆者の数も年々減少している。この原爆投下の事実を後世に伝え、残していかなければならないと強く思った。



< 平和祈念像 >

3 心に残った風景

この写真は、平和公園内にある平和祈念像である。一つひとつの動作には意味があり、右手は原子爆弾の脅威を、左手は平和を、右足は原子爆弾投下直後の静けさを、左足は救った命を、閉じた目は犠牲者の冥福を祈っていることを表している。これからもあり続けるこの像は、世界に平和を発信するお手本のようなのだ。私たちもこの像のように堂々と、そして、大きな信念を抱いて平和を伝えていかなければならない。

4 研修を振り返って

この研修を通じて、戦争や核兵器の悲惨さが身に染みてわかった。私は伝えたいことが2つある。

1つ目は、核兵器ほど残酷な兵器はないということだ。現在の核兵器は、長崎に投下された

原子爆弾「ファットマン」の数百倍から数千倍の威力を持っている。もし、核兵器が使用されるのなら、しっかりと被爆の地、長崎を見てから判断して欲しい。過去の歴史から悲惨さを学ばなければならないのだ。

2つ目は、戦争を未然に防ぐことである。戦争が起きてしまうと核兵器が使用される可能性が高くなってしまふ。核兵器を使用させないためにも、しっかりと国際的な話し合いを進めなければならない。

今回、このような派遣事業が行われたのは、郡山市、そして平和を考える市民の集い実行委員会の方々の熱い思いがあったからこそである。心から感謝したい。そして、この経験は私にとって一生の財産となるだろう。

この事業によって、福島復興がより一層早くなればと思う。

伝え続ける平和への思い



郡山市立安積中学校2年 鎌田彩花

1 はじめに

小学生の頃、原爆について書かれたある本を読み、本の中の絵がしばらく頭から離れず苦悶した。原爆の被害についての書籍などを読んでいくうちに、より深い内容を知ることが怖くなってしまった。

しかし、当時の惨劇や被爆者の思いを今でも伝え続けようとしている方々を知り、私も原爆の恐ろしさを知らないままではいけない…、と考えが変わった。

そして原爆の被害について多くのことを学びたいと思い、長崎へ行くことを決意した。

2 研修の実際

長崎は活気にあふれる一面をもちつつ、どことなく落ち着いた雰囲気もただよう美しい街だった。

(1) 平和公園・原爆資料館

平和公園と原爆資料館は、班ごとに分かれて見学を行った。ガイドの方から原爆についてのお話を聞かせていただいた。

私が一番驚いたのは、翌10日の新聞が長崎の様子について「被害は些少」と報じたということだ。当時の新聞の発行の際には必ず軍の許可が必要で、陸軍による被害の様子を収めた写真も世間の目に触れることはなかった。酷い被害状況での国民の士気の低下を懸念し、事実と異なる記事を報じさせたことに私はいささか怒りを感じた。

資料館での展示物は、私たちに原爆の威力を物語った。原爆が投下された11時2分で止まった時計、熱線で沸騰した跡の残る屋根瓦。炭のように丸焦げになって倒れている少年の写真を

見たときは、動けなくなってしまった。

詳しいお話を聞き、実際の写真を見るのは、やはりとても辛かった。だが、このような出来事が再び繰り返されてはならない…という強い気持ちも湧いてきた。

(2) 平和祈念式典

私は長崎ブリックホールにて式典に参列した。はじめに被爆者の方による合唱、そして原爆死没者の名前の奉安と献水・献花が行われた。

献水は、原爆で水を求めて亡くなった方への弔いとして、小学生・中学生・高校生、そして被爆者とその遺族、それぞれの代表が行う。私はその様子を見ながら、長崎の方々の被害者への思いを改めて実感した。

(3) 青少年ピースフォーラム

2日間にわたり行われたピースフォーラムには、全国からおおよそ500人が参加していた。

1日目は、被爆者の深堀さんのお話を聞かせていただいた。深堀さんは14歳の時、爆心地から3.3kmの場所で被爆した。弟と母は即死し、妹もその日のうちに亡くなった。一時は生き延びたもう一人の弟も原爆症に苦しみ、「兄ちゃん死ぬなよ。」と言い残して亡くなったそう。絶対核はいけないということを心から分かって生活してほしい」という深堀さんの言葉を、私はたくさんの人に伝えていきたい。

2日目は、班ごとに「平和ではないと感じる時」と「平和の為に何をするか」について話し合った。はじめは、お互いに意見がすれ違ってもあったが、話し合いを進めるうちに納得できる点が見つかっていった。今回の話し合いで、「お互いの意見を聞き合い、理解しようとする」ということが戦争を無くすための一歩になれると感じた。



< 母と子の愛 >

今回のように、これからも色々な人と意見を交換し、考えを深め合っていきたい。

3 心に残った風景

上の写真は、爆心地公園に立っている「被爆50周年記念事業碑」だ。

「傷ついた子供は過去の日本の姿」を、「子を抱く母は日本を支えた世界の国々」を表わすそうだ。

初めにこの像を見た際は、母子愛があふれる像と思っていたが、実は「傷ついた子を抱く母の慈悲心と、永久の平和をあらわす像」だということの後から知った。

実際に、現代の平和は過去の犠牲の上に成り立っているという事実を思い知らされた。この平和が途切れることのないようにしていくことが、自分たち新たな世代の責務であると忘れずにいたい。

4 研修を振り返って

今回の研修では、書籍やテレビだけでは分からない原爆の本当の恐ろしさを学ぶことができた。そして同時に、長崎の方々がその事実を多くの人に伝えようとしているということを知った。

以前までは原爆について避けていたが、これからは多くを学び、さらに今回学んできたことも含め多くの人に伝えていきたい。

原爆について知ることはとても辛いことだ。しかし、一人ひとりがその現実をしっかりと受け止めることが大事だと今回の研修で分かった。唯一の被爆国である日本に住む一人として、私は、これからも原爆や戦争への考えを深めて、周囲へ伝えていきたい。

平和な世界を作るために



郡山市立安積第二中学校2年 熊坂 遥介

1 はじめに

1945年8月9日、長崎に原子爆弾が投下された、という歴史は知ってはいたが、落とされた原子爆弾のことや、長崎にどれほどの被害が出たかなどの詳細はあまり分からなかった。これを機に長崎で起きた悲劇や戦争の悲惨さを自分自身の目で確認し、二度と戦争が起こらない平和な世界を作るために、僕たちが何か行動を起こし、考えなければいけないことがあるのではないかと思い、今回の研修に参加した。

2 研修の実際

(1) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館には、原爆が投下された午前11時2分を指して止まった柱時計や、爆風と熱風で脚が曲がった中学校の給水タンク、あまりの熱さで変形した瓶など、原爆の威力をまざまざと見せつけられる多くのものが展示されていた。

その中で、僕が最も衝撃を受けたのは、被爆した人たちの写真だ。爆心地で黒焦げになった遺体、爆風でガラスや木片が全身に突き刺さった人、熱線によって皮膚が焼け、肉や骨が露出してしまった人、放射線によって様々な病気になった多くの人々。どの写真も目を背けたくなるほど痛々しく、苦しんでいった様子が容易に想像でき、戦争の恐ろしさを感じずにはいられなかった。

(2) 青少年ピースフォーラム

ここでは、各自治体から派遣されている学生と交流を深めた。

1日目には、被爆者の深堀讓治さんのお話があった。彼は原子爆弾により家族4人を失った

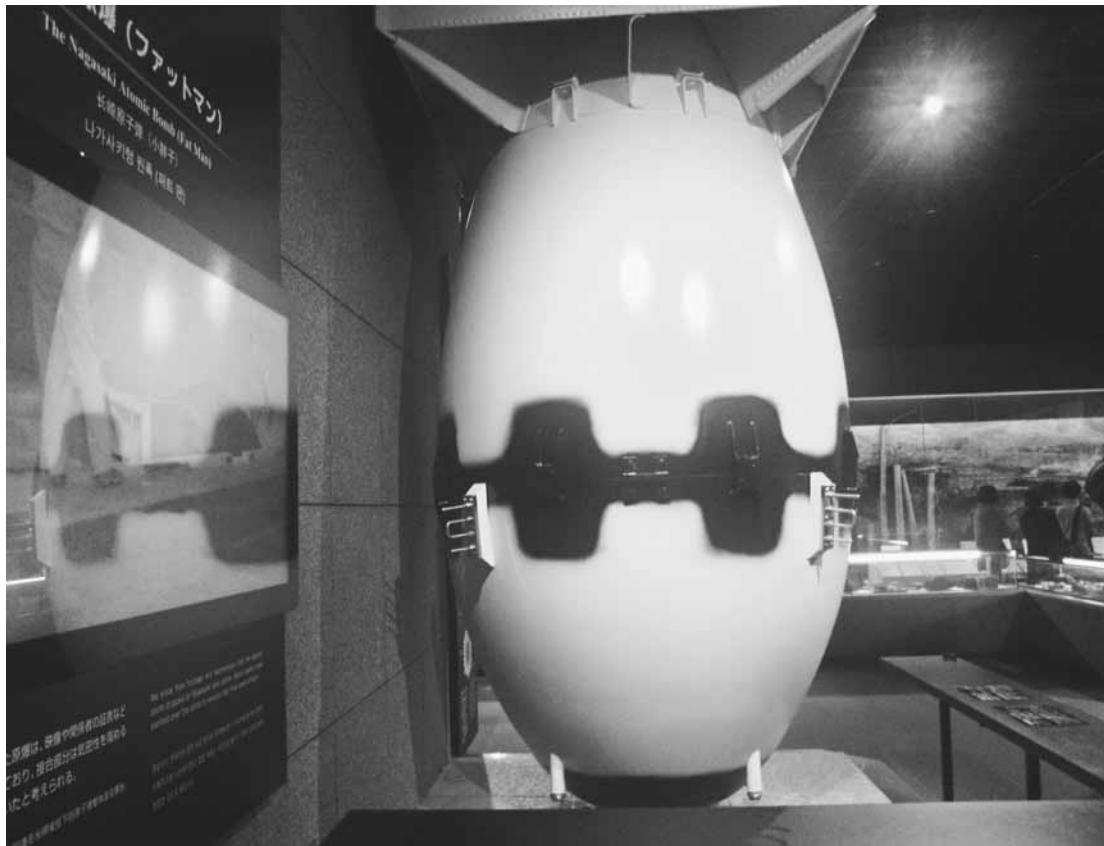
そうで、僕と同じ14歳で家族を亡くしたのだ、と思っただけで心がとても痛んだ。家族を亡くした悲しみを抱えたまま、戦争を知らない僕たちに語り掛けてくれた言葉一つひとつが、とても重く感じられた。

2日目は、「平和」について班ごとに話し合った。僕たちの班では、学校の「平和」をどのように作ることができるか、というテーマで話し合ったのだが、自分の身近な人に対してその相手を思いやり、まずやさしく接することこそ、平和に通ずる一歩ではないかと思った。

(3) 長崎平和祈念式典

今年は被爆者、被爆者の家族の他に、世界各国からも多くの人々が参列した為、僕たち全員が平和公園で参列することは出来なかったが、世界中の人々が恒久平和を望み、祈りを捧げた式典はとても厳かで、僕の心にもとても響いたものであった。72年前、この地で7万4千人余りの人々が原子爆弾によって犠牲になり、運よく生き延びた方々もその後さまざまな後遺症に苦しんでいる状況を目の当たりにして、僕はこの地球上に核兵器があってはいけないと改めて感じた。

普通、亡くなった人には花を捧げるのだが、この平和祈念式典では“水”を捧げていたことがとても心に残った。原子爆弾で亡くなった多くの方々が最後に求めたのが“水”であったことを考えると、とても苦しい思いで亡くなっていった様子が目に浮かんだ。



< 長崎に投下された原子爆弾 >

3 心に残った風景

この写真は、長崎に投下された原子爆弾の模型である。ふっくらしたその形状から「ファットマン」と呼ばれたそうだが、この一発の爆弾が、一瞬にして多くの人々を死に至らしめたのである。その破壊力も凄まじく、7万4千人余りという当時の長崎市の人口の3分の1の人が一瞬で亡くなったのだ。爆心地の温度は3,000度から4,000度にもなり、4 km離れた場所でも熱傷を負うほどの恐ろしい威力を持った核兵器だった。この模型を初めて見たときに、僕は怒りを抑えることができなかった。なぜこのような核兵器でしか、戦争を終わりにできなかったのだろうか、と。

現在、世界中には核兵器として使用できる核弾頭が1万5千発以上あると言われている。これだけの核弾頭が使用されたら、と考えるだけでも恐ろしいことだ。唯一の被爆国の国民である、僕たち日本人が、全ての核兵器がなくなるように地道に訴えていくことはとても大事なことであり、今後、核兵器のない平和な世界が来ることを切に願っている。

4 研修を振り返って

研修を終えて、普段、僕と同居している祖父に戦時中の話を聞いてみた。郡山は4度の空襲を受け、約500人もの人々が亡くなったとのことだった。僕たちの住んでいる郡山にも、戦争の爪痕が残っていると分かって、非常に驚いた。

戦争がないことが当たり前と思っていた僕たちにとって、今回の研修は、戦争の恐ろしさや平和の尊さを実感させられたものとなった。そして、平和な世界を作るために、僕が今回学んだことを一人でも多くの人に伝えなくてはならない、という思いも生まれた。平和を願い、常に相手の気持ちをおもいやる。みんながそのような気持ちでいられる世界が作れたら、本当に素晴らしいことだ。今もどこかで起きている紛争が、全てなくなり、みんなが笑顔で暮らせる世界を目指して日々考えていこうと思う。

平和を願って



郡山市立三穂田中学校 2年 佐藤 史織

1 はじめに

1945年8月9日、長崎に一発の原子爆弾が投下された。今から、72年前にこのような出来事があったことは知っていた。だが、その原子爆弾がどのような影響を当時の人々に与えたのか、どんなものなのか、ということは知らなかった。そこで、長崎に原子爆弾が投下されたときの被害とその後の長崎の復興について学びたい、そして、たくさんの人に自分自身が目を見て、耳で聞いて感じてきたことを自分なりの言葉で伝え、知ってもらい、自分たちの住む福島復興へ繋げていきたいと思い、この研修に参加した。

2 研修の実際

初めて九州を、そして長崎を訪れた。青く、どこまでも広がる美しい海、活気にあふれている街、そしてたくさんの自然が広がっている長崎を見て、私は感動したと同時に驚いた。それは、当時の影響があまり見受けられなかったからだ。しかし、長崎の街には原爆の爪痕が残されていた。それを見て、「本当にこの場所に、原子爆弾が投下されたんだな」と実感し、胸が痛くなった。

(1) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館には、原子爆弾が投下される前の写真、原爆投下直後の写真、原子爆弾の被害を受けた人の写真、そして、当時人々が幸せに暮らしていたであろう長崎を最悪の形にしてしまった、原子爆弾「ファットマン」の模型があった。このファットマンの模型を見たとき私は、当時のアメリカとこの原子爆弾に少し怒りをおぼえ、心が苦しくなった。このほかに、

熱線により皮膚が焼けてしまった少年の写真など、目をそむけたくくなるような資料がたくさんあった。

この、長崎原爆資料館に展示されてあるすべての写真や資料からは、当時の被害の大きさを感じさせられた。

そして、改めて核兵器の恐ろしさを感じた。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、全国の小・中・高校生と一緒に「平和」について学習した。その中で、被爆者である深堀さんのお話が心に残った。今の私たちの暮らしからは、全く考えられないことがたくさんあった。そして、深堀さんは最後に「私たちは、地球がいつまでも平和であることを願っています」と、悲しそうに、だけど強い声でおっしゃった。私はその言葉を聞いて、「世界を平和にするために、できることはどんどん挑戦しよう」と、自分の心に決めた。そして、もう二度とこのような悲劇を繰り返してはいけないと思った。

(3) 平和祈念式典

8月9日に、平和祈念式典が行われた。被爆者合唱で歌われた「もう二度と」という曲の歌詞が強く心に残った。そして、午前11時2分に黙とうを行った。同時に、平和の鐘が辺りに強く鳴り響いた。私は、「72年前の今日の出来事を忘れてはならない、そして、きちんと後世に伝えていこう」と心に誓った。



< 平和の泉 >

3 心に残った風景

私が一番心に残った写真は、平和公園にある「平和の泉」である。当時、原爆で被害にあった人々は「水を、水を」と水を求めながら亡くなっていったそうだ。

私は、これを読んで、心が痛く、辛く、悲しくなった。それは、ある日の少女の日記からだ。「のどが乾いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくて どうとうあぶらの浮いたまま飲みました」である。何度見ても苦しく、悲しい気持ちになる。今ある「平和」が当たり前のことではないのだと、強く感じさせられた。

そして、これまでなんとなく過ごしてきた一日一日を、大切にしていこうと心に決めた。

この「平和の泉」は、「戦争は何もいいことを生み出さない」ことと、「今ある幸せ、平和は当たり前ではない」ということを改めて感じさせてくれた。

4 研修を振り返って

この研修を振り返り、原爆の悲惨さや命と平和の尊さ、戦争はいいことを生み出さない、ということ学ぶことができた。そして復興した現在の長崎を見て、もしも、原爆で被害にあった人々に伝えられるなら、「当時とは比べものにならないくらい食料があり、技術も発展していて、何より人々の笑い声や笑顔がたくさんあります。今、私たちは平和に暮らしています。ありがとう。」と、伝えたい。

私たちは、世界で唯一の被爆国として、この苦しみや悲しみ、そして核兵器や戦争の悲惨さを世界に、そして後世に伝えていく義務がある。私は、核兵器や戦争がなくなる平和な世の中を強く願っている。それを実現するためには、私たち若者が真剣に平和について考え、向き合い、世界へ訴えることが大切だと私は思う。

最後に、私はこの貴重な体験で得たものをしっかりとたくさんの人々に伝え、これからの福島復興と世界の平和の実現のため、経験を役立てていきたいと思う。そして、少しずつだけれど一步一步確実に、自分たちで平和な未来を築いていきたい。

原子爆弾の脅威



郡山市立逢瀬中学校2年 遠藤 颯人

1 はじめに

1945年8月6日広島、8月9日長崎。日本は原子爆弾という脅威に晒される。私たち若い世代は原子爆弾という名前は知っているが、それが後の広島、長崎に何をもたらしたかという事や、今も苦しんでいる人たちがいる事を知らない人が多いと思う。自分もそのうちの一人だった。東日本大震災で福島が放射線の被害を受け、広島、長崎はどの様にして目に見えない放射線と焼け野原だった所から美しい町を取り戻したのか関心を持ち、長崎派遣事業に参加した。

核兵器を保有している国がある以上、唯一原子爆弾の被害を受けた国の人間として原子爆弾の恐ろしさを後世に伝えなければならないと思う。伝える事で平和への強い思いと行動が生まれると思う。

2 研修の実際

(1) 如己堂・永井隆記念館

如己堂は、放射線の影響により白血病に侵された永井隆博士が、書物を書いたりしていたわずか2畳ほどの小さな家であった。永井隆記念館には、永井博士が書いた書物や詩、永井博士自身の記録がたくさん展示されている。

永井博士は白血病に侵されながらも、いち早く原爆で負傷した人々の救護活動を行い、それを続けた。僕は、自分の命を削ってまでも救護活動や作家として活動する永井博士は、強い意志と平和を愛する心を持っている人だと感じた。博士のそうした行動は世界中に平和を訴えているのではないかと思う。

(2) 原爆資料館

原爆資料館には、爆風や熱線で甚大な被害を

受けた物や当時の写真などが展示されている。ここではフラッシュ撮影が禁止されている。その理由は、フラッシュは原爆を連想するからだとガイドさんが教えてくれた。フラッシュ＝原爆と結びつく位に原爆の恐ろしさや悲惨さを感じられた。

中には実物大の原子爆弾の模型があった。全長3.6メートル、重さが4.6トンもある為太った人を意味する「ファットマン」という名前が付けられている。プルトニウム爆弾だ。模型だが、見た時僕は背筋が冷たくなった。日本に核兵器はないが、世界には核兵器を持っている国があるので、戦争のない平和な世界になってほしいと強く願う。

(3) 青少年ピースフォーラム

2日間にわたって行われた青少年ピースフォーラムでは、全国から集まった小学生・中学生・高校生と平和について学んだ。

被爆者である深堀讓治さんの話で、心に残った言葉がある。それは、「その場所に居ないと悲劇はわからない」というものだった。今回僕たちが学び、知った原子爆弾の恐ろしさや、核兵器がもたらす悲惨さは計り知れないものだ。その計り知れない恐怖を実際に体験した讓治さんの話を聴いて、「もうこんな事は二度と起こってはいけないんだ!」と強く思った。

さらに、今の原子爆弾は、長崎に投下された物より威力が100倍強いと聞いた。そんなものが一刻も早く世界から無くなってほしいと思った。

(4) 平和祈念式典

世界で唯一の被爆者の合唱団である、「被爆者歌う会ひまわり」の方たちの歌から始まった。その歌声は澄み渡り、聴く人の心をぐっと掴む



＜ 平和の尊さを発信する永井隆博士 ＞

様な素晴らしいものだった。「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」という歌詞があり、涙が出そうになった。平和を祈って長崎の鐘が打ち鳴らされた時は、様々な国や地域から来ていた人たちと一体となって心から平和を願い、愛する気持ちが強くなったのと同時に、平和のバトンを未来へ繋げなくてはならないと感じた。

3 心に残った風景

この写真は、放射線の影響で白血病になった永井隆博士が本を書く姿である。永井博士は余命3年という宣告を受けたにもかかわらず、救護活動や放射線の研究を続けた。如己堂で17冊の本を書き、人々に平和を訴え続けた。僕は、永井博士の行動は、世界が核兵器を捨て、平和になる事を強く望んでいたからできたのではないかと思った。永井博士の言葉を読んで胸がいっぱいになった。こうした事を今度は僕たちが、学校の友達など周囲の人たちに伝えていかなければならないと強く思った。

4 研修を振り返って

僕は、長崎派遣事業に参加して、学校で習ったよりも、原爆の威力や悲惨さを詳しく知ることができた。実際に被爆された方の話を聴き、核兵器がいかに恐ろしく、人間を苦しめるものかという事も学んだ。これからは、長崎の研修で学んだ事を身近な人たちに伝えていきたいと思う。

今、僕たちは、「世界中が平和になるために、戦争をやめよう！核兵器を捨てよう！」と声をあげなければならない。

最後に、僕たちが今、普通の生活を送れるのは当たり前的事ではない。「平和」だからだ。

戦争のない世界を目指して



郡山市立片平中学校2年 高橋 采那

1 はじめに

私は、1945年8月9日、長崎に原子爆弾が投下された事実は知っていた。しかし、実際どのような被害を受けて、どのくらいの人が苦しんだのか。原子爆弾・核兵器の恐ろしさについて詳しいことは知らなかった。教科書やテレビだけでは、分からないことがたくさんある。調べても、分からないことだらけである。そこで、現地に行って今まで分からなかったこと、知りたかったことを学ぼうと思い、この「長崎派遣事業」に参加した。

2 研修の実際

(1) 如己堂・永井隆記念館

「如己堂」は、長崎の被爆から約3年後の1948年（昭和23年）3月、永井隆博士のために長崎市浦上の人達やカトリック教会の協力により建てられた。如己堂という名前は、「己の如く隣人を愛せよ」という言葉から名付けられたそうだ。永井隆博士はここで、白血病の療養をしていた。

永井隆博士は、こんな言葉を残している。

「原子爆弾は長崎でおしまい！長崎がピリオド！平和は長崎から！」

これは戦争のない世界を願い続けた博士からのメッセージだ。他にもいろいろある。私は、このようなメッセージや原爆の悲惨さを、身近にいる人達だけでなく世界中の人々にも伝えていかなければならないと強く思った。

(2) 青少年ピースフォーラム

2日間にわたって行われた青少年ピースフォーラムでは、全国から集まった小・中・高校生が「平和」について考えた。

1日目は、当時の様子について学んだ。初めに、原爆被爆者である深堀讓治さんの話を聞いた。深堀さんは、「においと温度がないと現実味がない」とおっしゃっていた。それを聞いて共感する部分がたくさんあった。東日本大震災で私は津波の被害を受けていない。だから、においも温度も感じるができなかった。原爆でもそうだ。しかし私達は、においも温度も分からないが、どんな事があったのか伝える事は出来ると思う。

2日目は、核兵器について学んだ。核兵器を持っている国としてはアメリカやロシアなどがあり、世界中に約14,900発の核弾頭があるといわれている。核兵器の廃絶を目指す人々が平和を願っていても、このままでは平和への道が途切れてしまうと私は思う。

(3) 原爆資料館

原爆資料館には、長崎に落とされた原子爆弾「ファットマン」の模型が展示されていた。見ただけではその恐ろしさは分からないが、話を聞くととても恐ろしいものだ実感できた。ファットマンの他に、現代の核兵器の模型も展示されていた。ファットマンとは違い、長細い形である。現代の核兵器は、ファットマンの数倍から数百倍の威力を持つものまでである。この核兵器を使用したら、また莫大な被害が出て、たくさんの方が苦しみ、悲しみ、とてもつらい経験をしてしまう。私もこんなつらい経験はしたくない。

このつらい経験は、人々の心に深く、一生消えない傷をつけることになる。だから、この世界にはたくさんの核兵器があるが、二度と使用しない世界を私達の手で創りたい。



< 一本柱鳥居 >

3 心に残った風景

一本柱鳥居は、爆心地から南東へ約 800m の場所にある山王神社の鳥居。左手石垣の影響か、左側の柱は前方に倒れ、爆風の圧力を多少避けた片方だけが残り、現在も建っている。これは、私達が間近に見られる被爆した建物である。

今までの私は、一本柱鳥居を見ても原爆の悲惨さを感じることができなかつたと思う。でも、今の私だったら、原爆の悲惨さを感じることができると思う。伝えることも、今の私ならできると思う。

この一本柱鳥居が長崎にある限り、私達は世界に長崎の原爆被害について伝えることができる。また、一本柱鳥居を見るたびに、私達はこの長崎派遣事業で学んだことを思い出すことができると思う。

4 研修を振り返って

私は、この長崎派遣事業に参加することができて本当に良かったと思う。長崎で起きたことについて詳しく学ぶことができ、「平和が普通」という概念を捨てることができた。

72 年経った今でも原爆による身体への傷、心への傷が癒えない人がまだまだたくさんいること、戦争はたくさんの死者を出し、多くの人々を傷つけることになること、私はこれらのことを絶対に忘れてはいけないと思う。もし忘れてしまったら、世界中の人々に原爆の悲惨さを伝えることができなくなってしまおうし、身近な人にも伝えられなくなってしまおう。再び、恐ろしい戦争が起こってしまうかもしれない。

今でも、世界ではテロや核実験などが行われている。この状況は平和とはいえない。平和といえるのは、まだ先のこともかもしれないが、平和を願い続けることはできる。この小さな行いがいつか大きな力となって、平和につながると私は信じている。

長崎発見！



郡山市立喜久田中学校2年 佐藤良則

1 はじめに

「長崎」といえば、どんなことを思い出すだろうか？中学校において、社会科の地理や歴史に出てくる長崎は、桃山文化での「カステラ」や九州地方での「雲仙岳」などであり、私はそのような事柄を思い出す。私が、先生から長崎派遣事業の話聞いたとき、即座にそのような社会で学習した出来事が頭に浮かんだ。しかし、よく話を聞いてみると、第二次世界大戦中に原子爆弾が広島と長崎に落とされ、郡山市では、「核兵器廃絶都市宣言」に基づく平和への取り組みとして、平和の尊さや核兵器使用の悲惨さとその廃絶の必要性について、長崎で研修を行うというような取り組みを行っていることを知った。もちろん、私たちの世代は戦争の経験はなく、どのような悲惨な出来事が起こったかは、本を読んだり、話を聞いたりすることでしか知ることができない。だからこそ、その苦しみや悲しみを次の世代に伝えていかなければならないという使命があるような気がしている。そのため、私は、先生からこの話を聞いたとき、とてもこの事業に興味を持った。私自身が長崎に行って、様々な経験をするべきなのだと思います。参加を決意した。

2 研修の実際

(1) 長崎市永井隆記念館

永井隆博士は、長崎医科大学医院で被爆し大けがを負ったにもかかわらず、わが身をかえりみず、生き残った医師や看護婦、技師とともに、負傷した人々の救護活動を行った人物である。記念館には、その永井博士のゆかりの品々が展示してあった。

その中で、永井博士からのメッセージがある。「戦争はおろかなことだ！戦争に勝ちも負けもない。あるのは滅びだけである。」そんな言葉が印象に残る記念館であった。

(2) 原爆資料館

被爆の惨状を示す写真、原爆が投下されるに至った経過、核兵器開発の歴史など、大変貴重なものが展示してあった。

この資料館で見学した中で、私が最も衝撃を受けたものは、熱線により皮膚が焼けただけ、肉や骨までもが露出した写真で、正直、目を覆いたくなるようなものだった。「これが核兵器の恐ろしさなのか…」と唖然と眺めることしかできなかった。また、11時2分で時を止めた時計や実際に長崎に落とされた原子爆弾「ファットマン」の模型などが、原子爆弾投下という悲しい歴史の証拠品として展示してあった。多くの命が一瞬にして止まってしまったかと思うと、とても悲しい気持ちになった。

(3) 平和公園

小高い丘にある平和公園は、悲惨な戦争を二度と繰り返さないという誓いと、世界平和への願いを込めて作られた公園である。

その公園で圧倒的な存在感を示していたのが「平和祈念像」だ。この像の天を指した右手は「原爆の脅威」を、水平に伸ばした左手は「平和」を、軽く閉じた瞼は「原爆犠牲者の冥福を祈る」という思いを込めて作られている。

原子爆弾が落とされた悲惨な現状を目の当たりにした研修であったが、現在の復興した長崎の様子から、人間の強さを感じた。



< 如己愛人の精神 >

3 心に残った風景

この写真は、永井隆博士が生きるうえでの思想とした“己(おのれ)のごとく隣人を愛せよ”(自分を愛するように、まわりの人を愛しましょう)という博士の直筆書である。教会の仲間から贈られた、たたみ2畳ほどの小さな家に、博士はカトリックの聖書の中の教えから“如己堂”と名付け、ここで寝たままで原爆による病気の研究をしたり、「長崎の鐘」や「この子を残して」などの本を書いたりして、原子爆弾の恐ろしさや戦争のおろかさ、「いのち」と「平和」の大切さを訴えた。

はたして、私自身、他人のことを自分のことのように思いやることができるのだろうか。この言葉を知ったとき不安に感じた。学校で経験してきた思いやりや優しさより、さらに深みや重みを感じた。この言葉は、まさに戦争により、そして原子爆弾により、人の命は尊いものであることを経験したからこそ言える言葉なのではないかと思う。私は、この永井隆博士の言葉が、心に残った。戦争や原子爆弾のような経験はしたくないが、この深く重い言葉を受け止めて生活したいと感じる。

4 研修を振り返って

長崎に原子爆弾が落とされてから72年という長い年月が経った。今の日本は、世界と比べれば比較的安全と言えるだろう。しかし、日本だけが平和であればいいというものではない。世界には、内戦により食べるものがなくなってしまっている国や、ミサイルを発射し続けている国がある。

また、原子爆弾投下という悲惨な出来事があったにもかかわらず、自国安全のためといい核兵器を保有し続けている国がある。そのため、核兵器を使用したりされたりするかもしれないという恐怖が、罪のない人たちにつきまとい続けているのである。日本は世界唯一の被爆国として、非核三原則「核兵器をもたず、つくらず、もちこませず」を宣言している。世界から原爆をなくすためには、私も含め、日本全体でこの非核三原則を世界に向けて訴え続けることが必要なのではないかと思う。

しかし、その原爆による被害を実体験した方が少なくなっているという現状がある。そのため、私たち若い世代が、今回実際に長崎に行って見たもの、聞いたことなど、五感で感じたことすべてを次の世代へ伝えていかなければいけないという使命を感じた研修であった。

長崎から世界へ平和発信



郡山市立熱海中学校2年 瀧田 怜菜

1 はじめに

長崎は72年前、8月9日、午前11時2分にたった一発の原子爆弾『ファットマン』によって、尊い命が奪われ、辺り一帯が焼け野原になった。私がこのことを知ったのは、つい最近のことだ。長崎研修への参加を機に、祖母に原子爆弾について聞くと、原子爆弾だけでなく、戦争の悲惨さ恐ろしさについて教えてくれたが、私は、祖母の話では分からなかったことを知ろうと思い長崎研修に参加した。

2 研修の実際

初めて来た長崎。晴れていたこともあり、そこには美しい自然の景色が広がっていた。山と海に囲まれて夜景がきれいな長崎…。72年前のあの惨状は感じられなかった。

(1) 原爆資料館

原爆資料館には、11時2分で止まった時計や皮膚がただれている写真など、想像を絶する、見ているだけで悲惨さを知ることができる展示物が多くあった。

中でも、入口近くにある『ナガサキ』という作品は印象に残っている。この作品は、原爆投下の3、4日後に日本画家と洋画家の夫婦が描いたものだ。黒と赤だけで描かれており、人々が水を求めている姿や亡くなっている姿など臨場感あるもので、その空間だけ時間が止まっているようだった。

原爆の被害は、生き残った人々にも及び、白血病や癌などで亡くなり、今も苦しんでいる人がたくさんいる。展示物の中には『ファットマン』の模型があった。予想より小さく、たったこれだけで、長崎の何万人もの人々が亡くなっ

たかと思うと、原爆や核兵器をなぜ作り続けるのだろうかと思議でしかない。また、現在、原爆にかかる費用は日本の国家予算に匹敵するそう。もしそのお金があったら、貧しい暮らしをしている人や国民のために使ったらどうだろうか。そのほうが社会貢献になり、豊かになると思った。

(2) 平和祈念式典

平和祈念式典。長崎に原爆が投下された、8月9日に合わせて実施された。午前11時2分に長崎の鐘が平和公園内に鳴り響き、黙とうを捧げた。長崎の鐘の音は優しいものだったが、被爆者、被爆者遺族の心が癒えることはないだろう。長崎市長が長崎平和宣言をし、核兵器禁止条約について触れていた。被爆者、被爆者遺族、長崎市民がこの条約を待ち望んでいたことだろう。だが、核兵器を保有する国はこの条約に反対している。世界で唯一の被爆国日本が、先頭に立って訴えていけば世界からの核兵器廃絶も可能だろう。一日でも早く、一分でも早く、核兵器を無くしてほしい。

(3) 青少年ピースフォーラム

2日間で全国各地から派遣された平和使節団の方々と『平和』について考え、交流をした。平和について考える時間では、身近なところでの平和を考えた。様々な意見が飛び交い、私たちは平和な中で生活していることを改めて感じた。

また、被爆者の深堀讓治さんから直接、当時の話を伺った。讓治さんは当時14歳で被爆したが、中心地から3.3キロ離れたところにいて生き延びたそう。だが、母と弟2人、妹が亡くなったそう。朝一緒に朝食をとっていたのにもう会えないなんて、酷すぎると思った。被



< 浦上天主堂遺壁 >

爆者の声を聞いた私たちは、原爆について知らない人たちに伝えていくのが使命ではないかと思った。

3 心に残った風景

この壁は、当時のまま残っている建物だ。上から爆風が吹いていた中で、当時のまま残っているのは凄と思った。浦上天主堂は江戸時代末期に建てられた大浦天主堂をルーツとしている。

明治時代となり、キリスト教が再び信仰できるようになったとき、町の人々が浦上村の庄屋の跡地を買い取り、浦上天主堂が計30年以上という長い年月をかけて作られた。当時は東洋一の聖堂といわれるほど壮大なものだった。原爆によって焼け落ちたが、再建が始まった。私は、キリスト教への信仰心が原爆投下後の人々を救ったのではないかと考えた。その中の一人、永井隆さんは、『己の如く隣人を愛せよ』という言葉を残している。自分の身を犠牲にしてまで、患者を助けた隆さん。彼のような人がいなかったら、長崎の目覚ましい復興はなかったと思う。

4 研修を振り返って

この研修に参加して、テレビや祖母の話からだけではわからないことが多くあった。様々な体験をした人の話を聞き、命の重さや大切さ、原爆の悲惨さ、恐ろしさを再認識した。

私たちの周りは、たくさんの平和で満たされていると思った。72年前のあの日、「お昼は何だろう」と考えていた子どもや昼食を作っていた母親。そんなありふれた日常が、たった一つの爆弾で一瞬にして奪われたのはなんと残酷なことだろう。

原爆や核兵器は、たった一つでも多くの被害が及ぶのにも関わらず、様々な国が保有している。世界平和のためには、まず協力し合って原爆・核兵器を無くしていくことが第一歩だと思った。

72年前の出来事を語り継ぐ人は、年々減少している。この数少ない人たちの話を聞き、私たちが次の世代に語り継ぐ側になっていきたい。

広島・長崎の出来事を未来永劫繰り返さないために…。

今とこれからの平和について



郡山市立湖南中学校 2年 高橋 伸太郎

1 はじめに

僕は、漫画「はだしのゲン」を読んだことがある。そこで原子爆弾の恐ろしさと、平和の尊さがどれだけ大切なものかを知った。だが、戦争や原爆の恐ろしさを知らないという人が、今では多くいる。

原子爆弾が実際に投下され、その爪痕が今でもはっきりと残っている長崎に行き、戦争や原子爆弾の恐ろしさについて、さらに詳しく知りたいと思った。さらに、それを周りの人々に伝えて、もう二度と核兵器が使用されないようにしたいと思い、今回の派遣事業に参加した。

2 研修の実際

僕は、今回初めて長崎に行った。そこは、思っていたよりも栄えた街で、緑やきれいな海が輝く美しいところだった。

(1) 長崎原爆資料館

ここには、11時2分で止まってしまった時計や、熱線で溶け固まってしまった当時の硬貨、原爆がもたらした人体への悪影響など、原爆と原爆投下後の長崎について詳細に解説、展示がしてあった。中でも僕が一番恐ろしく思ったのは、放射線による被害だ。体内から細胞を破壊し、熱線や爆風で無傷だった人も、後々体に影響が出始め、白内障や白血病、ガンなどを引き起こした。生き残った者たちにまで「死」の恐怖を与え続けるこの話を聞いて、僕は震えが止まらなかった。

僕は、ガイドの人に「使用することのできる原子爆弾は今世界には何個あるのですか。」と、質問した。すると、原爆と水爆の2種類では大小合わせて15,350発あるという。広島と長崎

を焼け野原にしたあの爆弾が、1万発以上もあると聞いてとても驚いた。

これを聞いて僕は、「どんな理由があろうと原爆を二度と使わない。そして、どんな理由があろうと原爆を二度と作ってはならないのだ」と、強く思った。

(2) 平和祈念式典（平和公園）

2017年8月9日11時2分。僕は平和公園で平和祈念式典に参列し、1分間の黙祷をした。72年前のこの時間に原爆が投下され、たくさんの方が命を落とし、長崎一面が焼け野原となった。

式典である歌が流れた。そこには「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」という歌詞があった。僕はこの歌を聞いて、被爆者の方々の悲しく辛い気持ちが、胸に伝わってきた。

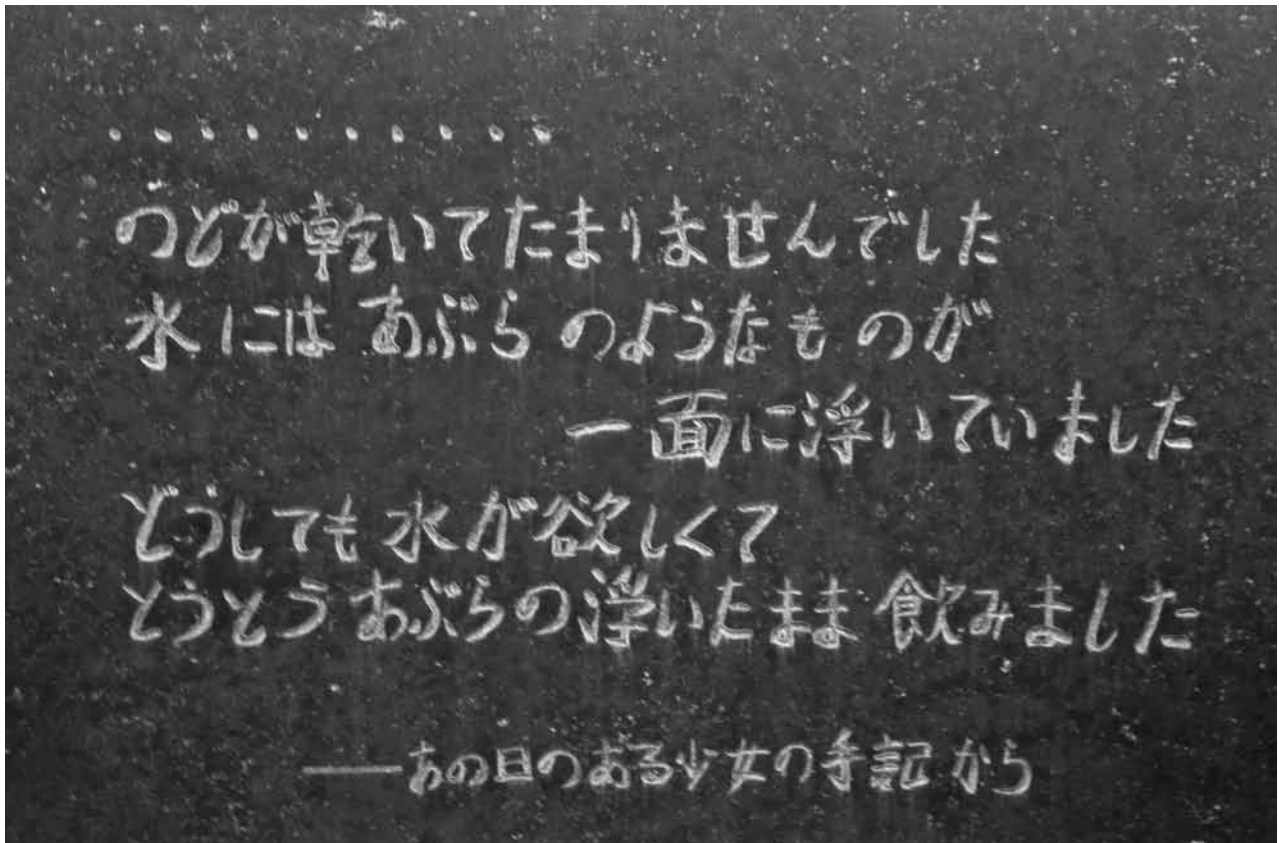
平和祈念式典で、僕は改めて平和の大切さを知った。

(3) 青少年ピースフォーラム

(深堀讓治さんの話)

青少年ピースフォーラムでは、実際に戦争を生き抜き、原爆を体験した深堀讓治さんのお話を聞いた。

当時14歳だった深堀さんは、爆心地から3.3km離れたところで作業をしていたところ、原爆に襲われた。遠くでとてもまぶしい光が見えると、「ドーン」という大きな爆発音が聞こえ、それとともに激しい爆風が襲い、周りの木や建物が一瞬にして倒れたという。幸いにもケガはせず、すぐに自分の家に帰ったが、そこには、熱線を浴び体中に大やけどを負った母の姿が地面に横たわっていた。最初、それが自分の母だとは気づかなかったが、かすかに燃え残った服で母だと確信した。別の場所で生き残って



< 平和の泉にあった石碑 >

いた弟も、体はだんだん衰弱し、「あんちゃん…死ぬなよ…」と言って息を引き取った。

僕はこの話を聞いて、涙がこぼれた。14歳、これは自分の年と同じ年である。突然母と弟を失った悲しさ。放射線の影響でいつ死んでしまうのかわからない恐怖に追われながら今まで生きてきた深堀さんを見て、とても胸が苦しくなった。

最後に深堀さんは、「その場にはいないと、本当の恐ろしさは分からない。だから、それを次の世代に伝えていかなければならない。」と話した。僕は、その場にはいなかった人間だが、それを伝えていける人間になりたいと思った。

3 心に残った風景

上の写真は、平和公園内の平和の泉にある石碑である。

今の生活は、食べ物も十分にあり、水だって飲みたいときにいくらでも飲むことができる。僕はこれが「平和」なことではないかと思う。

しかし、この石碑を見ると、水が飲めずにどれだけさまよっていたのかが伝わってくる。そ

して、「この平和はあたりまえじゃない。」と、改めてそれが感じられた。

この平和な日本があるのは、どうしてだろうか。それは、平和にしようと努力した人がいたからではないか。「平和でない日本」を「平和な日本」にしたように、どんどん「平和な国」が増えていけばいいなと思った。

4 研修を振り返って

僕は、今回の研修を通して、戦争、原爆の恐ろしさ、そして平和の尊さを実際の爪痕を見ながら、改めて知ることができた。

今でも戦争をしていて、住む場所、食べる物に困っている国はたくさんある。核兵器を所持している国もある。これらを一度に解決させることは難しいかもしれないが、核兵器や戦争の恐ろしさ、そして平和の尊さなどを僕たちが次の世代に伝えていき、地球の人々すべてが「平和」について考え、「戦争のない地球」をつくれることを願いたい。

最後に、このような貴重な研修に参加できたことに、心から感謝したい。

平和を繋ぐ



郡山市立守山中学校2年 草野奈月

1 はじめに

私は、小学校の頃から戦争にはとても興味があった。戦争についての本を読んだり、インターネットで調べたりするなどして、大体の知識は身につけていると思っていた。しかし、実際に起こった出来事、原爆投下後の状態についてももっと深く知りたいと思い、今回の長崎派遣事業に参加した。

2 研修の実際

初めて訪れた長崎は、72年前にあの恐ろしい原子爆弾が投下されたとは思えないくらいとても美しい街だった。

(1) 平和祈念式典

私は、長崎ブリックホールからスクリーンを通して平和祈念式典に参列した。

初めに、被爆された方たちによる合唱が披露された。「二度と作らないで わたしたち被爆者を」という言葉から、強い思いが画面越しからでも伝わった。そして、午前11時2分に平和の鐘とともに黙とうが行われた。私は、そのとき、被爆者の方に聞いた話を思い出していた。生きたくても生きられなかった方、誰かも分からなくなってしまった家族、友達、親戚を見ながら歩いたという道。かろうじて生き残った方でも今でも苦しい思いをしていると思うと、とても胸が苦しくなった。

また、長崎市長 田上富久さんの長崎平和宣言で、日本政府が核兵器禁止条約の交渉会議に参加していないと耳にした。私も日本政府の姿勢が理解できない。唯一の被爆国として、もっと世界に訴えなければいけないことは沢山あると思う。もっと、核兵器禁止条約について、しっ

かり向き合ってほしいと思った。

(2) 青少年ピースフォーラム

2日間にわたり行われた青少年ピースフォーラムでは、全国の小学生から社会人までが集まり、被爆された方のお話をうかがったり、平和について考えたりして、いろんな方との交流を深めた。

その中で、ピースボランティアという、青少年ピースフォーラムの運営を行ってくれる方が「嘉代子桜」という紙芝居を読んでくれた。その話を聞いて学んだことがあった。日ごろから親に感謝し、どんなに腹立つことがあっても、家を出るときは必ず笑顔で「行ってきます」と伝えなければいけないことだ。「嘉代子桜」の話の中で、嘉代子が家を出る前に少し不機嫌になってしまい、笑顔で「行ってきます」と伝えられずに被爆してしまい、亡くなってしまうという話があった。誰もが、戦争を行っていない今でも、いつ死んでしまうかはわからない。だから、日ごろから親に感謝し、どんなことがあっても家を出るときは必ず、笑顔で「行ってきます」と伝えることが大切だと「嘉代子桜」から教えられた。

また、嘉代子が亡くなってしまったその後に、嘉代子の両親が忘れないようにと小学校の校庭に桜の種を植え、大事に育てていて、今でも桜が愛されていることにとっても感動した。これからは、今の自分、親に対する態度、周りの人々を思う気持ちについてしっかり見直さなければいけないと感じた。



＜ 平和の母子像 ＞

3 心に残った風景

この写真は、平和を願ってつくられた像である。私は、この像を見たとき、深く、強い思いが込められているのではないかと感じた。

まだ小さいのに、「熱い」「痛い」など、私たちがしたら想像もつかないような恐怖を知ることになった子どもたち、助けてあげたいのに自分もつらく、悲しく、死んでしまった大人たちの叫びが今にも聞こえてきそうで、胸が苦しくなった。

この平和の母子像からは、言葉で聞くこととはまた違う、原子爆弾について知ることができたような気がした。大人にすぎる子どもたち、私よりもずっと幼い子たちが、つらい思いをして亡くなってしまったということがこの像から伝わった。

私には、この像を見ることだけでも色々なことが伝わってきた。この像に込められた、深く、強いメッセージをしっかりと受け止め、私が言葉にかえてしっかりと伝えていきたい。

4 研修を振り返って

私は、この長崎派遣事業を通して、今までの自分とは違う考えを持つことができた。今回訪問した一つひとつの場所に様々な意味、メッセージが込められていること、実際に被爆された方の話を聞き、また新たな知識を得ることもできた。つらい思いをしたにも関わらず、私たちに真剣な表情であの日何が起きたのかを語ってくれた。これは、原子爆弾によって何が起こったのか、どれだけつらい思いをしたのかを後世に伝えていくということを、私たちに託してくれたと私は信じている。この被爆された方の気持ちを無駄にはしないよう、これから先、この事実を知らない人たちにしっかりと伝えていきたいと思う。

今の世界を見てみると、まだ核兵器廃絶というのは難しい気もする。このことに関しては、唯一の被爆国として、日本が訴え続けなければいけない。今回学んだことをこれからの生かし、平和に繋げていきたい。

本当の平和の実現のために



郡山市立高瀬中学校2年 松本直樹

1 はじめに

なぜ、核兵器が生まれてしまったのか。調べてみると驚くべき理由だった。最初は、キュリー夫人がラジウムを発見したことから始まった。そこから、身の回りにある物質に莫大なエネルギーがあると知った科学者が、開発を進めて行われたのが核分裂実験だったそうだ。そのエネルギーを、殺人の兵器である核兵器ではなく、平和的なものに利用できなかったのかと思った。その時間と労力を別のことに使ってほしかった。

偶然から生まれた最悪の兵器は広島と長崎へ向けられた。被爆者達は何を思っているのか、核兵器の恐ろしさを広く伝えることはできないかと考え、今回の長崎派遣事業に参加した。

2 研修の実際

原爆投下から72年経った現在の長崎の町は、とても活気に溢れていた。しかし、原爆による悲しい歴史はどれも胸が痛むものばかりだった。

(1) 如己堂・永井隆記念館

永井隆記念館には、博士が生前に行った数々のこと、著書や遺品などが展示されていた。永井博士はX線での結核の検診を行っていたが、フィルム不足で透視による検診を続けたことにより、白血病になってしまった。その後、爆心地から700メートルの距離の診察室で被爆。それから6年後の2月に亡くなった。僕は、そんな永井さんのこの言葉が心に残った。

「如己愛人（己の如く人を愛せよ）」

永井さんが大切にしていた言葉だ。これを子ども達にも教えていたそうだ。如己堂もこの言

葉からつけられた名で、僕もこんな素晴らしい精神で生きていけたら人として誇りを持てるのではないかと感じた。

志半ば、悔いを残して亡くなってしまった永井さんの意志は、後世の人々にしっかりと受け継がれていると感じた。

(2) 原爆資料館

原爆資料館に展示されていたのは、当時の被害が生々しく残るものばかりだった。折れ曲がった鉄骨、11時2分で止まった時計、そして原子爆弾「ファットマン」…。さらには、原爆投下後に撮影された写真など衝撃的なものも展示されていた。特に印象的だったのは、放射線を浴びたことで皮膚がただれてしまった人の写真だ。体と心に傷を負いながら生きることがどれだけつらいことか。考えるだけでも心が苦しくなった。僕は、このような人々をこれ以上増やすようなことを絶対にしてはいけないと強く思った。

(3) 平和祈念式典（長崎ブリックホール）

原爆投下の日である8月9日に行われた平和祈念式典には、多くの人々が参列していた。被爆者だけの合唱団は、涙をのみながら平和への思いを歌にしていた。そして、11時2分。黙とうが始まった。僕も日本人の一人として、様々な思いで胸が一杯だった。僕は、祈念式典の会場ではなく長崎ブリックホールのスクリーン越しに見ていたが、長崎市長の「長崎平和宣言」や、海外から来ていた外国人を見て、平和実現のためにこれだけ多くの人々が関わっていることを知り、平和の大切さを改めて実感した。そして、僕もその中の一人としてこの式典に参列することができて本当に良かったと思う。



＜ 雨の中の平和祈念像 ＞

3 心に残った風景

これは平和祈念像の写真だ。僕にはこの像がとても印象に残っている。

式典が終わり、平和祈念像を見に行った時のことだった。急に雨が降り始め、しかも祈念像に近づくにつれて雨足は徐々に強くなっていった。祈念像の目の前に来て、ふと像を見上げると、像に落ちる雨が、冥福を祈っている閉じた目からこぼれる涙に見えたのだった。

福島から来た次の世代の僕達に何かを伝えようとしているのか、72年目のこの日を思って泣いているのか…。様々な思いが僕の胸中をよぎった。

この平和祈念像は、この先もずっと、いつまでも残るだろう。そしてまた、涙を流すこともあるかもしれない。僕は、被爆者の方々の思いをこの平和祈念像と共に、いつまでも残していきたいと思ったし、残していかなければならないと思った。

4 研修を振り返って

この長崎派遣で、平和への考えが変わった。僕の今までの「平和」は、僕自身が何事もなく当たり前で生活できるという、自分のことだけしか見えていないものだった。しかし、本当の「平和」というのは、戦争や核兵器という過ちを繰り返してはいけないという思いや、実際にそれらを体験した人の声に耳を傾けることであり、それを次の世代に伝え、受け継ぎ、発展させていくことなのではないかと考えるようになった。

さらに、長崎の人々が目指す本当の平和の実現のためには、核兵器廃絶が必要だということが良くわかった。現在の核兵器は、「ファットマン」の100倍の威力があるという。それが使用されたらと考えると、とても恐ろしい。

この世界の未来のためにも、絶対に核兵器を廃絶しなければならないと強く思った。被爆者の方々は、あの原爆の恐怖や被害を忘れず、さらに、自分達のような被爆者をこれ以上増やさないでほしいと願っている。この思いを、地元に戻り、多くの人々に伝えていきたいと感じた。それが、この研修に参加して多くのことを学ぶことができた僕の使命だと思っている。

平和への願い



郡山市立二瀬中学校2年 遠藤聖奈

1 はじめに

私は、戦争中に広島・長崎に原子爆弾が投下されたことは知っていた。だが、原子爆弾によってどんな影響が及ぼされたのか、その当時の人々はどのような生活を過ごしていたのかは知らなかった。そこで、長崎に原爆が投下された時の被害やどのようにして復興していったのかを学び、福島に帰ってから周りの人たちに原子爆弾の恐ろしさ、平和の大切さについて伝え、知ってもらいたいと考え、この研修に参加しようと思った。

2 研修の実際

初めて訪れた長崎の町は、72年前に原子爆弾が落とされたとは思えないほどすてきな町だった。

(1) 長崎原爆資料館

原爆資料館には、たくさんの写真や展示物があり、どれも想像を絶するものばかりだった。展示物には実際の被爆者の写真や映像もあり、中には気分が悪くなってしまいそうなものもあった。熱線で全身にやけどを負い、肉や骨までもが露出している人。大量の放射線でケロイドに苦しむ人々。写真の向こう側からその痛みや苦しみを感じ、とても悲しい気持ちになった。

また、原爆資料館には、72年前に投下された原子爆弾の模型があった。その原子爆弾は、「ファットマン」と呼ばれている。なぜ、そう呼ばれているかというと、全長3.6メートル、重さが4.6トンもあることから、「太った人」を意味するため「ファットマン」と呼ばれているのだ。私は、模型を見ても長崎にこれが落とされたなんて考えもできなかった。この原子爆

弾が7万4千人もの命を一瞬にして奪ったのだ。そう思うと核兵器の恐ろしさを感じ、絶対に世界からなくさなければならぬと思った。

(2) 平和祈念式典

私は、平和公園で平和祈念式典に参列することができた。式典では、午前11時2分に平和の鐘が鳴り、黙とうが捧げられた。72年前のこの時間に、原子爆弾が落とされ、たくさんの人が犠牲となった。

式典には、とても多くの人が参列していた。最初に、被爆された方たちによる合唱があった。歌のタイトルは「もう二度と」。歌詞の中には「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」という一節があり、これを聞いた瞬間、被爆された方たちの悲しみが心に刺さった。辛くて辛くて大変だったろうと思った。

式典で長崎市長さんが、「被爆者の平均年齢は81歳を超えました。被爆者のいる時代の終わりが近づいています。」と話されていた。これを聞いて、原爆のことが忘れ去られることのないよう、私たちが行動していかなければならないと思った。



< あの日のある少女の手記 >

3 心に残った風景

この写真は、平和公園にある平和の泉である。「のどが乾いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくて どうとうあぶらの浮いたまま飲みました」

この石碑の文を読んだとき、とても衝撃的だった。まだ9歳の女の子にこのような経験をさせたと思うと、とても辛くなった。水を飲める環境にいる私には信じられなかった。想像するだけで悲しい気持ちになった。

今後、この女の子のようなことが起こらないようにするためにも、日本、そして世界が平和になることを心から祈った。

4 研修を振り返って

4日間を振り返って、この研修に参加して本当に良かったと思った。平和の大切さや尊さについてとても考えさせられた。

研修前より原爆に対する思いが強くなったし、原爆に対する考え方も変わったと思う。貴重な体験がたくさんでき、なかなか出会えないような人との出会いや出来事も、たくさんあった。

今回の体験を通して、平和に暮らすと言うことがいかに大切なことなのかを今後も考え、また、原爆の恐ろしさを少しでも多くの人に知ってもらえるようにし、今後の人生に役立てていきたい。

「平和」を守るために



郡山市立郡山第一中学校 2年 鏡 真之介

1 はじめに

僕の曾祖母は、実際に戦争を体験している。僕がまだ幼いころから、曾祖母の家を訪れるたびに戦争の話聞いていたので、戦争について興味があった。ある時、戦争のことを特集したテレビ番組を見て、衝撃を受けるとともに、戦争についてもっと深いところまで詳しく知りたいと思い、今回の派遣事業に参加した。

2 研修の実際

初めて自分の足で訪れた長崎は、自然豊かで美しい街並みが続いていた。その景色からは、到底 72 年前に原爆が落とされた場所とは想像すらできなかった。復興に携わってきた人たちの思いと力強さを感じた。

(1) 如己堂・永井隆記念館

永井隆記念館では、永井隆博士の一生が展示されていた。

放射線科医として長年研究をし、白血病を患いながらも医学の進歩のために全力を尽くした永井隆博士は、長崎医科大学の研究室で被爆した。自身も大けがを負いながらも負傷した人々の救護活動をした、「心」が強い人物である。病状が悪化してからは、作家として 17 冊もの本を書いた。僕はこの場所で、永井隆博士の、平和を願い命の大切さを伝えようとする気持ちを強く感じた。また博士の、病を患いながらも研究を続ける姿や、身を粉にして救護活動にあたる姿にとっても感動した。

如己堂は、僕の想像よりも遥かに小さい家だった。しかし、ここには多くの人の気持ちが込められていることを知った。

“己の如く隣人を愛せよ”これは如己堂の名

の由来となったキリスト教の聖書の一節である。博士は、病状が悪化したのち、「この子を残して」や「長崎の鐘」などの本をこの如己堂で書いた。また、ここでは原爆による病気についても研究していた。体調がすぐれない中で、世の中のためにこれほどのことができる博士を尊敬した。

いつか僕も博士のように、どんな状況下でも人のために行動できる人になりたいと思った。

(2) 長崎原爆資料館

原爆資料館には、原爆が投下された 11 時 2 分で止まったままの時計や、熱によってガラス瓶が溶け、人の手とくっついたもの、一瞬にして崩れた建物の写真など、原爆の恐ろしさを物語るものばかりが展示されていた。

「熱線、爆風、放射線」これが人体へ影響を及ぼす三大要素だ。熱線で皮膚が焼けただれ、爆風により人々は吹き飛ばされ、目に見えない放射線により徐々に身体が蝕まれる。これらが、たった一発の原爆によって引き起こされてしまうのだ。僕は、人々の命が一瞬にして奪われる原爆に今まで以上の恐怖を覚えた。そして、二度と核兵器を使ってはならないと思った。

(3) 青少年ピースフォーラム

全国から生徒たちが集まり行われた青少年ピースフォーラムは、被爆者である深堀譲治さんの講話から始まった。深堀さんは、中学 3 年生の時に被爆し、母を含め家族 4 人を亡くしている。そんな深堀さんの話は、どれも胸を締めつけるものだった。「家族が死んでいくのに、涙の一つも出なかった」という話が特に印象的だった。その後、こじんまりフィールドワークと平和学習があった。フィールドワークでは、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館や原爆資料



< 黒焦げとなった少年 >

館の展望デッキなど4ヶ所に行った。展望デッキには、原爆投下後の写真が置いてあり、過去と現在を見比べることができた。一度は全てが失われたが、現在は緑に囲まれた穏やかな景色が広がっていた。その景色からは、この街を復興させた人たちの思いが伝わってきた。

2日目は、平和について討論したり、一人ひとりが平和宣言をしたりした。班のみんなと活発な意見交換をすることができた。

多くの人と交流し、貴重な体験ができた2日間だった。

3 心に残った風景

これは、長崎原爆資料館に展示されていた、原爆による爆風と熱線によって吹き飛ばされ黒焦げとなった、今の僕たちと同じ中学2年生の少年だ。

僕はこの写真を見た時、あまりに残酷で目を覆いたくなった。だが、これが72年前の長崎で実際に起きた現実である。このように原爆は、一瞬にして大切な人やあたりまえの日常を奪い去る。それにも関わらず、原爆が今なお世界に約15,000発もあり、使用を検討している国もある。しかし、長崎での悲劇を二度と繰り返してはならない。世界中から核兵器がなくなことを祈る。

4 研修を振り返って

僕はこの研修で、参加を決めた理由の一つである、「戦争について、深いところまで知る」ことを達成することができたと思う。

平和祈念式典で、長崎市長の田上富久さんによる長崎平和宣言が行われた。その中に「ノーモア ヒバクシャ」という言葉が出てきた。この言葉は、世界中の誰もが核兵器による惨禍を体験することがないようにという、被爆者の心からの願いを表している。

現在、被爆者の平均年齢は80歳を超え、原爆の悲惨さを伝えられる人が減ってきている。その一方で、世界ではテロや紛争が続き、多くの人の命が奪われている。この状況では、近い将来、また原爆がどこかに落とされてしまうかも知れない。だが、そんなことが絶対にあってはならない。今の僕が、世界に平和を訴えることは難しいが、今回学んだことを周りの人たちに伝えることはできる。そして、原爆の恐ろしさについて知り、平和であることのありがたさを感じてほしい。

僕も、これから世界が「平和」に向かっていくことを願う。

思いを形に



郡山市立郡山第二中学校2年 堀田 不同

1 はじめに

2011年、福島第一原子力発電所で事故が起こった。当時小学1年生だった私は、家の庭に割れ目ができ、原子力発電所は大丈夫かと思った。

あれから6年、完全な復興はほど遠い。福島県では、原発の事故処理や、除染に伴う課題は解決されていないものも多く、帰還困難区域の指定が解除されない地域もある。だから、被爆地長崎を訪れることは、核の恐ろしさを直接肌で感じている私達にとって意味があると思う。

2 研修の実際

長崎の平和の象徴である鳩や千羽鶴、72年前を思い出させる建物の数々。

(1) 青少年ピースフォーラム

ここで2日間にわたり、全国から集まった人と接した。

深堀讓治さんのお話は、空襲警報が鳴り終わった際に原爆で目の前で人が殺されてゆく怖さであった。一見便利になり穏やかに暮らしている福島私達にとって、放射線の影響に対する不安をぬぐいきれない生活を強いられている日々が続いており、他人事ではない。この日、深堀さんは体調がすぐれず、短い時間の講話となってしまったが、高齢化が進む中で限られた被爆者の一人として最後まで語り続けてくれた。母、弟、妹が一発の原爆により苦しんで死んでいく様子。髪はちりちりになり、肌は青黒くなって垂れ下がり、水を求めて歩く姿。川のある所は沢山の死体がたまり、水をねだる弟にもあげられなかった深堀さん。その後、その弟の体に斑点が。当時放射線への知識はなく、何

が何だかわからぬまま周囲の人々は絶命してゆく。道の真ん中で弟が死に、涙も出なかったという。しかし、この話を原爆の悲劇のみにとらえてはいけないと思う。本題は平和を実現させることだ。核兵器のない世界のために、私達がどのようなことを実践していくかである。私は、未だ核兵器を持つ大国の傘の下で自国の安全を確保しようとする浅はかなこの日本の現在にはとても幼さを感じる。被爆した国がなぜ、核兵器を拒否する条約に参加しないのだろう。

2日目に行われた意見交換会では、いろいろなテーマで話し合いが行われた。様々な意見が出されたが、本当に核兵器廃絶を実現するためには、私達のように長崎で起こったことを発信することが必要である。「核兵器なんて関係ないよ」とそっぽを向いている人に、どのようにして関心をもってもらうかが重要だ。小さなことだが、私が福島の現状を他県の人々に伝えることは、核兵器の恐ろしさを知ってもらうことにもつながると思う。

(2) 平和祈念式典

式は被爆者の方の合唱から始まった。曲が進むと会場には数分前とは違った雰囲気。11時2分には黙祷。1分間はとても長く、長崎の鐘の音はしばらく私の耳から離れなかった。そして、田上富久市長の長崎平和宣言。「あなたの目を見て、耳で聴いて、心で感じてください。」というフレーズは、私の長崎派遣希望の理由でもあり共感した。また、「最も怖いのは無関心なことです。」というフレーズでは市長の口調が一変し、会場の人々だけでなく世界中の多くの人達の心をつかむような訴えかけだった。広島・長崎で起こった悲劇を、世界で唯一の被爆地である日本で暮らしている私達は



＜ 恐怖を感じる防空壕 ＞

絶対に忘れてはいけないと思った。そして、二度と同じ悲劇を繰り返さない努力を具体的にやりたいと思った。

被爆者合唱以外にも多くの合唱があった。その中で「千羽鶴」の歌詞には心が温まった。沢山の思いが最後には虹色の鶴になるという所は、一人ひとりの思いを合わせることで核兵器を無くそうとすることに大きな意味があり、今後大切にしなければならないと実感した。投下から72年経っても新たな気持ちを明日へとつなげ、更に核兵器の無い世界を広げる行動をしたいと思った。

3 心に残った風景

長崎市内には、悲劇を後世に伝えようと、平和祈念像をはじめ多くのモニュメントがあった。私は、多くの人に当時の悲劇を感じ取ってもらうために、これらを保存する大切さも感じた。中でも「防空壕」が印象に残っている。思っていたよりも穴はずっと小さく、この中に大勢の人が身を寄せ合って隠れていた。「こんなところに」信じられない。原爆が落とされたとき、多くの人が入っていても原爆のエネルギーは止められずに死んでしまっただろう。当時のエネルギーの怖さを感じられる建物の前に立つとより間近に怖さを感じた。忘却は人間にとって都合の良い時もあるが、記憶を引き継ぐ時もある。

4 研修を振り返って

今回の研修では、復興し続ける長崎を見た。また、被爆された方の生の話を聴くと、私達が平和を築いていかなければならないし、それを具体的にどのように実行すべきかを考えることができた。被爆された方はどんな思いで72年間を過ごし、なぜ当時を語っているのか、私にも少し分かってきた。「平和とは何だろう」と、今まで表面だけ見ていたものがより深く迫ってきて、私は核兵器廃絶の重要性を強く感じた。

世界で本当の核兵器廃絶を実現するために、私も形にして伝えていくことができると思う。そしてすべきと感じた。誰もが平和を願っているのだ。言葉で自分の気持ちを表すだけでは平和は実現しない。ピースフォーラムのように、平和を願う人達が集まり意見を出し合い実践していくことが第一歩だと思う。だからこそ、長崎派遣で学んだ原爆の恐ろしさ、平和を実現させることの難しさ、行動の大切さを、言葉だけでなく様々な形で表現していきたい。

平和を実現させるという目標はあっても、活動に終わりはないのかもしれない。また、核兵器が無くなっても平和とは限らないし、人の心が変わらなければ本当の平和は作れないと思う。そのために私達が、もっと地道に努力して平和に対する思いを形にして周りに伝えていきたい。

「平和」は「生きる」ことから



郡山市立郡山第三中学校2年 丹野粹誠

1 はじめに

僕は、小学校低学年のとき初めて「せんそう」を知った。そのときはまだ漠然としていて、「オバケよりも怖いもの」としてしか認識していなかった。高学年になってからは、社会の授業などで、日本は「せん争」をしたことがあり、1945年8月6日に広島に、9日に長崎に「原子ばく弾」が落とされ、日本は負けてしまったのだと学んだ。

そして中学生になり、小学校で学んだ記憶も薄れかけていたころ、この長崎派遣事業の話をいただいた。最初は、断って、誰か別の人に行ってもらった方が良さだろうと思ったが、考えてみれば、戦争については小学校で学んだこと以外は何も知らなかった。

実際に現地で被爆した人が、僕たち若い世代に知ってもらいたいこと、伝えたいこと、伝えてもらいたいことはいったい何なのか。原子爆弾はどのくらいの被害をもたらしたのか。平和とは何なのか。知ってみたいこと、見てみたいものがたくさん出てきた。急にこの長崎派遣事業が新たな知識を得るまたとないチャンスに思えてきて、参加を決意した。

2 研修の実際

(1) 永井隆記念館

ここには、被爆した放射線科の医師、永井隆博士が被爆後に住んでいた「如己堂」をはじめとした、永井隆博士に関する資料が多数展示されていた。

この記念館の資料の中でも、特に印象に残ったものがある。

それは、博士の書だ。書いてある言葉はいたっ

てシンプルで、「どん底に大地あり」「平和を」そして「如己愛人」。「如己愛人」とは「己の如く人を愛せよ」という意味だ。この3つの書、最初に見たときには、当たり前のことではないかと思った。だが、改めて考えてみると、この書が書かれた当時、長崎は焼け野原。平和は存在せず、自分のことで精いっぱい、他人に気を遣う余裕はなかつただろう。そんなとき博士は、自分の如く他人を気遣い、平和を求め続けていったのだ。現代の平和な日常でさえ、他人を気遣うことは少なくなっているのに、被爆後の大変な状況下でそんなことができるなんて、当時の被爆者たちの力強さに感嘆の声を漏らすにはいられなかった。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、2日にわたり、全国の青少年と平和に関する意見交換をし、平和の尊さについて学んだ。

1日目の開会行事の中で、14歳のときに被爆した深堀讓治さんのお話を聞いた。深堀さんは、原爆によって、母、中学1年生・小学5年生の弟2人、5歳の妹を亡くしたという。僕にも姉と弟がいるが、深堀さんの悲しみは想像できない。深堀さんはお話の中で、何度も「原爆は実際に体感しないと分からない。」と言っていた。その言葉には、深堀さんの「もう二度と体験したくない、させたくない」という気持ちがこめられていたような気がした。

2日目には、いくつかの班に分かれて、原爆や戦争に限らず日常生活の中などでも、「平和でないときはどんなときか」、そして「平和にするためにはどうしたら良いのか」について意見を出し合った。僕たちの班では、学校の中の「平和でないとき」が多く出た。例えば、い



< 平和のために残した影 >

じめや陰口などだ。一人ひとりが様々な考え方を
持つ中で、トラブルを起こさないようにする
ためにはどうしたらよいかを話し合った。す
ると、一旦自分を見つめ直し、相手の立場にも
立ってみればよいのではないかという考えに
至った。そして、最後に「人のふり見て我がふ
り直す」という言葉にまとめられた。そして、
その言葉と他の班のまとめを、それぞれ大陸や
雲の形をしたシールに書き、全てを青い大きな
ボールに貼ると、平和な世界を目指す、希望に
あふれた小さな地球が完成した。これから、こ
んな地球にするために、懸命に平和の尊さを訴
え続けていこうと思った。

3 心に残った風景

この写真は、原爆資料館に展示されていた、
板壁に残ったはしごと監視兵の影だ。兵士が屋
上からはしごで降りてきたときに熱線の直射を
受け、はしごと兵士の影になったところ以外の
壁の塗料が剥がれ落ち、影のようになった。

この写真から、原爆が一瞬にして命も、平和
も灰にしてしまったことと、その恐怖が生々し
く伝わってくる。この兵士は無事だったのだろ
うか。もし生きていたのなら、立ち昇るキノコ
雲を見て、何を思い、何をしようとしたのだろ
うか。

もしかしたらこの影は、未来でまた悲惨な戦
争を繰り返すことがないように、被爆者たちの平
和を願う気持ちが形となって、残されたものな
のではないだろうか。

4 研修を振り返って

青少年ピースフォーラムでお話を聞いた深堀
譲治さんは、「眠りについて、起きてても何も変
わりのない、いつもの家の中で、生きていられ
ること」が何より幸せだという。

僕は、この長崎派遣事業に参加して、「平和」
は、今の何気ない日常の中で、起きて、食べて、
勉強して、話して、また眠れるということなの
だと知った。

だから僕は、今生きているということに感謝
して生きていきたいと思う。そして伝えたい。
一瞬にして「平和」が崩れ去っていく恐怖、不安、
絶望を。戦争によってもたらされたそれらの負
の感情を知ることは、平和な現在の幸せ、平和
の尊さを知ることだ。深堀さんのお話通り、実
際に体感しないとわからないことなのかもしれ
ない。それでも行動しないと始まらない。それ
が「平和」が僕に与えた使命なのだ。

ナガサキに原爆が投下された日



郡山市立郡山第四中学校2年 本 田 彩 乃

1 はじめに

私は、1945年8月9日に長崎に原子爆弾が投下されたことは知っていた。しかし、原子爆弾が投下されてどのようなことが起こったのか、生き残った人にどのような影響を与えたのかはよく知らなかった。そして、投下された後の長崎の様子や、長崎がどのようにして復興したのか知りたいと思った。また、被爆都市の今の姿を自分の目で確かめてみたいと思い、この長崎派遣事業に参加した。

2 研修の実際

私は今回の派遣事業で初めて長崎へ行った。72年前に原子爆弾が投下されたなんて到底思えないほど復興していた、活気あふれるとても美しい街だった。

(1) 永井隆記念館・如己堂

永井隆記念館には永井博士に関するものが置かれていた。永井博士は白血病に侵され余命3年を宣告された。そして、被爆して大怪我を負っても、わが身をかえりみず、負傷した人々の救護活動を行った。私は、余命3年と宣告され被爆して大怪我を負っても、自分より他人のことを思いやることのできる永井博士の行動は、容易にできることではないと思った。

「己の如く人を愛せよ」これは、永井博士が白血病の療養をするため3年間2人の子どもと一緒に暮らした如己堂の名前の元となった、聖書の一節である。如己堂はたった二畳一間の小さな家だ。ここで永井博士は、「長崎の鐘」や「この子を残して」などの本を書き、長崎の復興を願い、原爆の恐ろしさや平和の大切さを訴え続けた。私たちは、永井博士の思いを無駄にして

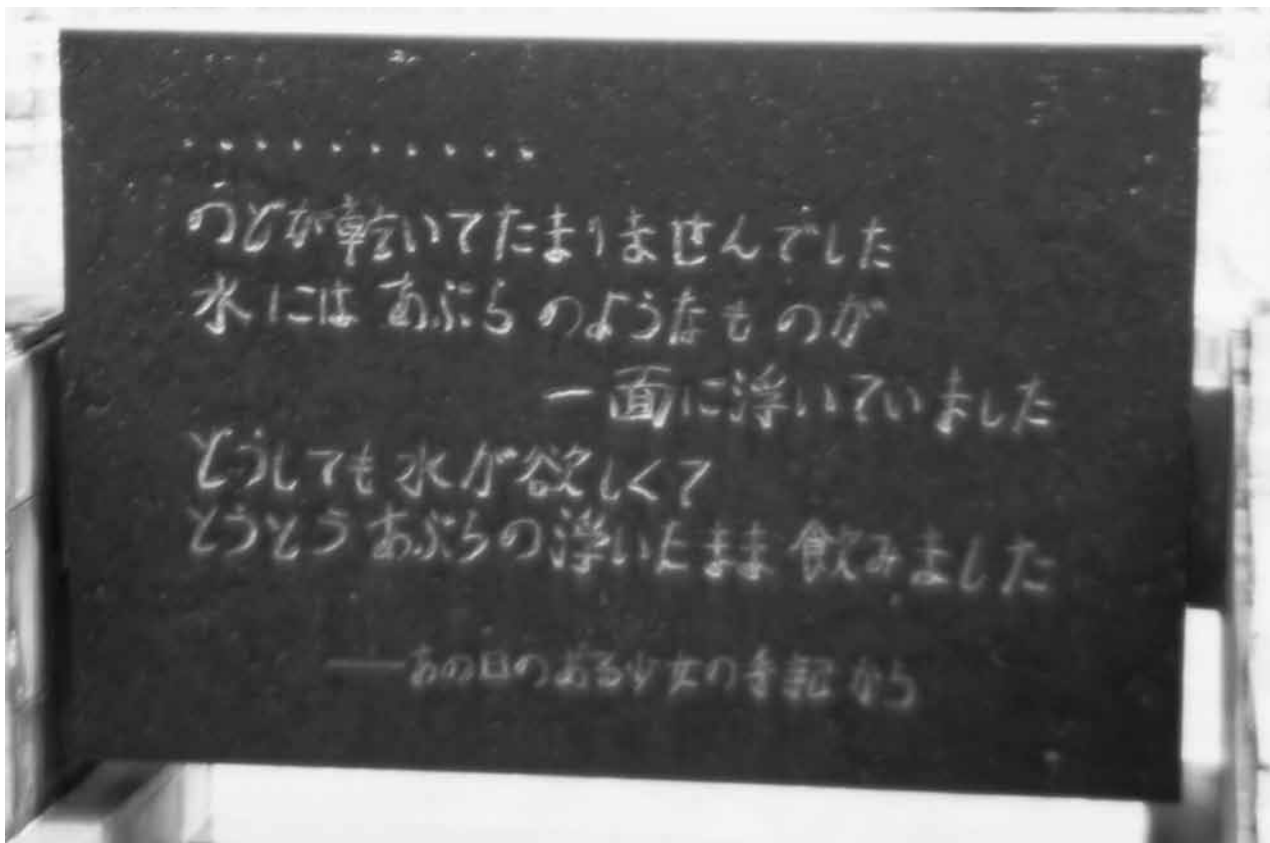
はいけないと思った。

(2) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館の中はまるで72年前のままのようだった。11時2分で止まった柱時計、爆風で脚が曲がった給水タンク、熱で溶けてくっついてしまった瓶、黒こげとなった少年や全身やけどの少女など目をそらしたくなるたくさんの写真…。私がその中で一番印象に残っているのは、長崎に投下された原子爆弾「ファットマン」の実物大模型だ。長さ3.25m、重さ4.5トン、火薬2万1千トン相当にもなるそう。私はこれを見て背筋がゾクッとした。これが自分の町に落ちてきたら、どんな悲惨な光景になるかと考えたからだ。そして、絶対に72年前と同じことを二度と繰り返してはならないと思った。

(3) 青少年ピースフォーラム

2日間にわたり青少年ピースフォーラムが開かれた。全国各地から代表が集まり、戦争や平和について考え意見交換をして交流を深めた。私たちはそこで、深堀譲治さんのお話を聞いた。深堀さんは14歳のときに被爆した。そして原爆により、母、中学1年生・小学5年生の弟2人、5歳の妹の4人を亡くしてしまった。私は胸が締め付けられた。深堀さんの喋っている様子から当時の辛さや苦しみが伝わってきたからだ。とても印象に残った言葉がある。それは「その場にはないと、わからない。」という言葉だ。そのとおりだと思った。絶対に核兵器を使ってはいけないし、戦争もいけない。私は、被爆者が体験した話をこれからも皆に伝えていきたい。



< 平和公園にある平和の泉の石碑 >

3 心に残った風景

この写真は、平和公園にある平和の泉の正面の石碑である。私は、この石碑の文を読んで、とても衝撃を受けた。

「のどが乾いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくて どうとうあぶらの浮いたまま飲みました」と石碑には書いてあった。これは、まだ9歳の女の子が実際に経験したことだ。私たちが生活している環境には、ここまで追い詰められてしまうような場面は一切ない。東日本大震災の時に水道水の供給がストップしたが、油の浮いた水を飲むまでの経験はしなかった。私は、この文で改めて平和が当たり前ではないことがわかった。ここは、「原爆の恐ろしさ」と「平和のありがたさ」がわかる場所だった。

今、世界では、同じような悲劇が繰り返されそうなニュースが毎日報道されている。日本でもその対策を考えなければいけない緊迫した情勢である。同じことが二度と繰り返されないように、平和に対する願いが一段と強くなった。

4 研修を振り返って

私はこの長崎派遣に参加して、たった1つの原子爆弾でたくさんの尊い命が奪われ、生き残った人たちにも病気などの傷を残した原子爆弾の恐ろしさ、怖さを研修に参加する前の何倍にも感じ学ぶことができた。そして、中学生のうちに被爆者の話を聞くことができ、また実際に原子爆弾が投下された場所を訪れることができ、とても貴重な体験をすることができた。研修に参加して、今まで過ごしてきた一日一日にありがたみなどを考えて生活ができる。当たり前がかけがえのないものを感じる。

この研修では、他校の友達とも仲良く楽しく過ごすことができた。いろいろな話もできた。今回研修で学んだことを友達や家族、知り合いに伝えていきたい。そしてその人から、また次の人に伝え、平和の大切さと原爆の恐ろしさを今までよりも深く感じてもらいたい。核兵器がない世界、戦争がない世界にしたい。私は、今回の経験を生かし、普通に生活できることへの感謝、当たり前前に生活できる喜びを忘れないでこれからの生活を送っていきたい。

戦争の怖さを伝える



郡山市立郡山第五中学校2年 吉田 龍之介

1 はじめに

僕は、戦争のことを自分には関係ないものだと思っていた。

でも、今回の研修に参加することが決まって、本当に関係のないことならこのような研修はないと考えて、自分達が目で戦争のこと、どのような被害があったのか、それらを知ろうとこの研修に参加した。

2 研修の実際

(1) 原爆資料館

ここには、原爆によってどのような被害を受けたのか、写真やモデルなどを使って展示してあった。11時2分で止まった時計、被害前の長崎の風景、浦上天主堂、ファットマン（長崎に落とされた原爆）などが展示してあった。

他にも、高熱によって溶けた6本の瓶、頭蓋骨の付着した鉄かぶと、熱線による人的被害の写真なども展示してあった。

正直自分は、これらの写真を見て恐怖を感じた。人がこのような、無残な姿になってしまうのかと思ったからだ。だから戦争も原爆も絶対にダメだと改めて感じたのである。

(2) 平和祈念式典

被爆72周年平和祈念式典で長崎平和宣言が行われた。僕らは長崎ブリックホールで観ていた。

その中で、核兵器を持つ国と核の傘下にいる国々に向けたメッセージや、日本に向けたメッセージがあった。日本が核兵器禁止条約に参加すれば、1つや2つの国の意見が変わり、少しでも核兵器を減らすことができる。僕はそう思った。

今では、被爆者の平均年齢は81歳を超えている。だからこそ自分達若い世代が、これからどんどん後世へ受け継がなくてはならないと、責任を感じた。

被爆者の方々が歌った「もう二度と」という曲に、「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」という歌詞が何度も出てくる。これは、もう二度と戦争や原爆による被害を起こさないでほしいという被爆者の願いが込められている。

(3) 青少年ピースフォーラム

研修2日目と3日目に、青少年ピースフォーラムに参加した。ピースフォーラムでは、被爆者の深堀譲治さんのお話を聞くことができた。

当時、14歳だった深堀さんは、爆心地から3.3kmの地点で学徒報国隊として働いているときに被爆した。ピンク色の光に包まれて爆風が来た。防空壕に逃げる途中で空を見ると、真っ赤な煙がもくもくと上がっていた。その後、煙が黒になっていった。

病院の患者達は、「あついあつい」と言っていた。道がなく、つまずいたのは遺体だった。やけどした人は、寝ている為ただれた血が背中に流れてのりのようにくっつき、うじ虫が鼻、口、目、耳から出入りしていた。深堀さんは、「その場にはないと苦しみ分からない、核は絶対にダメだ」と、強く訴え続けていた。

原爆により母や兄弟、妹も失ったけれど、その後強く生き、今回、核兵器の怖さを教えてくれた深堀さんを見てとても勇気もらった。

(4) 如己堂・永井隆記念館

永井博士は亡くなるまでずっと、「戦争をしてはいけない」と訴え続けた。

如己堂の名前の由来は、「己の如く隣人を愛



< 立派に立つ一本柱の鳥居 >

せよ」という言葉からきている。この言葉は、「自分と同じくらい誰にも優しく接しなさい」という意味がある。私の心に響いた。

3 心に残った風景

僕が心に残った風景は、山王神社にある一本柱の鳥居である。原爆の爆風による影響で一本の柱になってしまったのである。

一本になっても立派に立ち続けるその姿勢に、自分もがんばろうという気持ちになった。

あの日から、ずっと倒れず一本で立ち続けているのは、戦争の怖さを教えるためや核兵器がなくなしてほしいという願いがこめられているからだと思う。

だから、一分一秒でも早くみんなに戦争や原爆の怖さを知ってもらい、二度と同じことを繰り返してはならないと感じてほしい。

一本柱の鳥居がそう願っていると僕は感じた。

4 研修を振り返って

初めて来た長崎は、きれいな町で驚いた。

この研修は自分にとって、とても貴重な体験で大切なものとなった。実際に原爆が投下された場所に行き、自分の耳で聴き、自分の目で確かめたが、やはり戦争も原爆も自分には関係がないなんてことはなかった。

自分達若者が、「原爆・戦争の悲惨さ」を伝えなかったら、これから先、戦争や原爆のことを忘れてしまい、同じことを繰り返してしまう。だから、自分にできること、「伝えること」を、これから先も忘れないようにしたい。

長崎を最後の被爆地にするために、この世界から核兵器がなくなるために、そして、この怖さを二度と繰り返さないためにも、「原爆・戦争の悲惨さ」を伝えていこうと思う。

今ある平和の尊さを受け継いでいくために。

ノーモア・ゲンバク



郡山市立郡山第六中学校2年 菅野彩花

1 はじめに

戦争により、広島と長崎に原爆が落とされたことは知っていた。そして、どんな被害が出ていたのかも、ニュースや教科書を見て、おおよそのことは分かっていた。しかし、現地に行き実際に見たことは一度も無かった。今年、被爆者の方の平均年齢が81歳を超え、もうじきあの起こったことを体験した人はいなくなる。ますます原爆について伝えていかなければならないと思った。だからこそ、自分の目で見ることは大事だと思い、今回の派遣事業に参加することを決めた。

2 研修の実際

現在の長崎は、福島と同じように豊かな自然にあふれ、きれいな海が広がっている。本当にこの地に原爆が落とされたのかと疑うほどだった。

(1) 原爆資料館

ここには、被爆者の方の様子や、原爆による被害の大きさを示すものがたくさん展示してあった。資料の中に、皮膚が焼けただれている少年の写真があったが、痛々しく直視することはできなかった。改めて原爆の熱線のすさまじさを痛感した。

他にも、長崎に落とされた原爆「ファットマン」の模型もあった。とても大きかった。このたった一発で7万人もの命が奪われたのである。私は怖くてたまらなくなった。

また、生き延びた人々の体験談も展示されていた。そこからは、何年経っても苦しみを続けていることが分かった。やはり、原爆は一瞬にして人々の命を奪うだけでなく、その後の人生ま

でも大きく狂わせてしまうものだと思った。

ここを訪れて、原爆はこの世にあってはならないという思いが強くなった。

(2) 如己堂・永井隆記念館

自身は白血病に侵されながらも、戦争の被害者の治療にあたった永井隆博士が暮らしていた如己堂を見学した。如己堂は、永井博士が病氣療養を行うために建てられた。広さは、たったの二畳半しかない。病状が悪化し、寝たきりになりながらも、こんなに狭いところで平和を訴え続け、「長崎の鐘」や「いとし子よ」など、数々の著書を残している。

私は、永井博士の言葉で感銘を受けたものがある。それは、「いとし子よ」の中にある、「敵も愛しなさい。愛し愛し愛しぬいてこちらを憎むすきがないほど愛しなさい。」である。平和は愛から生まれると考えたのだ。すてきな考えだと思う。私も、永井博士が望んだように世界に愛が満ち溢れるようになれば、戦争などなくなるだろうと思った。

(3) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、2日間にわたり、全国から集まった学生と共に「平和」について考えた。

1日目は、被爆者の深堀さんからお話を聞いた。深堀さんは、働いていた工場で被爆し、母と弟2人と妹の4人を原爆で亡くしたそうだ。母と妹の遺体を見つけたときは、何も感じず、涙も出なかったという。原爆は、人の感情までも消し去ってしまったのだ。また、弟は一時は助かったものの、急性原爆症で1週間後に亡くなったそうだ。深堀さんは、「朝、何の心配もなく目覚め、平凡な一日を過ごすことが一番の幸せだ」と語っていた。私は、それにとっても共



< 平和の泉 >

感じた。そう思うことができる人が増えれば、平和に一步近づけるのではないかと思った。

2日目は、原爆のことをより詳しく学んだ。私の中で印象的だったのは、今と昔の原爆の威力の差を音で感じるものだ。球を鉄の鍋に流し込み、その音の違いを聞き取った。差は明確だった。今の威力を音で聞いたときは、背筋が凍りつくようだった。とにかく恐ろしかった。本当に核兵器を使わないで欲しいと思う。自分とは違う考えを持つ人と意見交換ができて、有意義な時間を過ごせた。

3 心に残った風景

私が心に残った風景は、平和公園にある平和の泉とその前に建つ石碑だ。平和の泉は、原爆により体の中まで焼けた被爆者が、「水を、水を」とうめきながら亡くなっていった霊に水をささげ、弔うために作られたものである。また、石碑には少女の言葉が書かれている。「のどが乾いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくて どうとうあぶらの浮いたまま飲みました」と。これを見たとき、私は、とても苦

しく悲しくなった。一人の少女がこんな辛い思いをしていたなんて。原爆の悲惨さがひしひしと伝わってくる場所だった。

4 研修を振り返って

今回の研修で、平和の大切さや命の尊さを改めて実感することができた。メディアを通して見たり、聴いたりするのではなく、実際に自分で見て聴くのは、大事だと思う。そこで分からないことがたくさんあるからだ。

72年前に落とされた原爆がたくさんの命を奪ったこと、そして、今だに苦しみ続けている人がいること。この事実を私たちは決して忘れてはいけない。もう二度と繰り返さないために。

被爆者の方たちが伝えられなくなる時代が必ず来る。そのときは、これから生きていく私たちが伝えていかなければいけない。それが、この研修の最大の意味であり、私たちに課せられた使命だと思う。

私は、世界が少しでも平和に近づくように、そして二度と惨劇を繰り返さないよう、伝え、訴え続けていこうと思う。

核兵器の恐ろしさと平和の大切さ



郡山市立郡山第七中学校2年 有 沼 優 汰

1 はじめに

私は、長崎に原子爆弾が落とされ、どのような被害を受けたかは小学校で学んでいたのを知っていた。また、太平洋戦争がどのようにして起こったのかに興味を持っていた。原子爆弾の恐ろしさや、長崎の当時のことを知るため、長崎派遣に参加した。

2 研修の実際

私は、生まれて初めて長崎を訪れた。今の長崎は、大きなビル、工場が多く広がっていて、活気あふれる町だった。本当に原子爆弾が落とされ、焼け野原になったとは私には思えなかった。私は、長崎の人々の苦しみや、そこからどのようにして復興していったのか考えた。

(1) 永井隆記念館と如己堂

最初に「永井隆博士」と聞いたとき、どのような功績を残した人か分からなかった。でも、永井隆記念館で素晴らしい人だと知った。

永井隆博士が、白血病と闘いながら、娘と息子の3人で暮らしていた如己堂も見学した。永井隆博士は、ここで「長崎の鐘」や「この子を残して」などの17冊の本を書いた。その本で、原子爆弾の恐ろしさや戦争の恐ろしさ、命や平和の大切さを訴え続けた。人々に生きる希望と勇気を与え続け、多くの人々の命を守るため救護活動を行った。

永井隆記念館に展示してあった永井隆博士のメッセージの中で、一番心に残ったのは、「戦争に勝ちも負けもない。あるのは滅びだけだ。」という言葉だ。私は、この言葉に共感した。戦争に勝っても負けても、犠牲者は出るからである。永井隆博士は、自分自身の命を犠牲にして

まで人々のために努力し続けた。私は、この姿を見て、未来に平和を必死で伝えようとしていくことにとても感動した。そして、私達が今の人達に、戦争をしてはいけないということを伝えたい。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、全国の小学生から高校生まで、いろいろな人達と「平和」について考え、また実際に被爆された方の講話を聞くことができた。原爆で家族を亡くした深堀讓治さんの話は、原子爆弾の恐ろしさや、長崎の人々の苦勞がすごく伝わってきた。被爆された方は、思い出して話すことが辛いはずなのに、私達に戦争の恐ろしさを伝えるため、次の世代へ伝え続けていくために話してくださった。聞いていて一番辛いと思ったのが、被爆して生き残った人達が水を求めている話だ。中には、のどが乾きすぎて我慢できずにあぶらの浮いている水を飲んでしまい、亡くなった人もいたという。原爆で犠牲になった人達のために、戦争の悲惨さと平和の大切さをしっかり伝えていくことが私達の使命だと強く感じた。

(3) 原爆資料館

原爆資料館で一番心に残ったのが、11時2分で止まった時計だ。当時の生活が、一瞬にして奪われたことがすごく伝わってきた。長崎に実際に落とされた原子爆弾の「ファットマン」の模型などもあった。広島に落とされた原子爆弾より長崎に落とされた「ファットマン」の方が、威力が大きいことを知った。長崎の人々の被害がすごく大きく、苦しんだことが伝わってきた。

のどが乾いてたまりませんでした
水にはあぶらのようなものが
一面に浮いていました
どうしても水が欲しくて
とうとうあぶらの浮いたまま飲みました
——あの日のある少女の手記から

< 女の子が伝えていること >

3 心に残った風景

私が一番心に残った風景は、平和公園の中にある「平和の泉」である。原爆で被害を受けた人々は、最後に「水がほしい」と言いながら亡くなってしまったとわかるものだった。

私は、これを読んで、あぶらが一面に浮いているのに飲んでしまったのは、本当にのどが渴いていたからだということがすごく伝わってきた。まだ9歳の女の子にこのような辛い経験をさせてしまった戦争に、すごい怒りを感じた。「平和の泉」は、水が無くて、水を飲めなかった人達のことを思いつくられた。水が飲めなくて亡くなっていくことの苦しさや辛さを身に染みて感じた。改めて、「平和」は当たり前ではないことを知った。

「平和の泉」は、「原爆の恐ろしさ」、「戦争の怖さ」を改めて感じさせてくれるところだった。そして、水が飲めないという苦しさをすごく感じた。「平和の泉」は、亡くなった人にささげる水だった。

4 研修を振り返って

私は、この長崎での研修を通して、戦争はたくさん人の命を奪い取ってしまうということ、核兵器や原子爆弾は多くの大事な命を奪ってしまうということを、自分の目を見て、耳で聞いて、体全体で感じる事ができて良かったと思っている。そして中学生のうちに、原爆や戦争と向き合い、考えられたことは、すごく貴重な体験だった。原爆がもたらす凄惨さ、そして、そのような状況を簡単につくってしまうことの恐ろしさを学ぶことができた。そして、二度と戦争を起こさないため、「平和」はすごく大切だということを伝えていかなければならない。

しかし、すぐ平和にできるのだろうか。戦争や事件、いじめなどが毎日どこかで起きており、平和とはいえない。

だから私達が、この長崎での研修で学び、体験してきたことを、家族、学校の友達、身近な人に伝えていくことが、「平和」への第一歩だと考える。

平和について考える



郡山市立緑ヶ丘中学校2年 高橋由奈

1 はじめに

小学生の時に、『はだしのゲン』の劇に出演して原子爆弾のことを初めて知った。そして、この話が作者の体験を元に描かれていることを知り、驚くとともに、もっと戦争や原子爆弾について知りたいと思っていた。

今回、長崎派遣事業の話聞き、72年前に何が起き、これから何を伝えていかなければならないのか、平和とは何かについて学ぶためにこの事業への参加を決めた。

2 研修の実際

(1) 如己堂・永井隆記念館

記念館の名前にもなっている永井隆博士は、長崎医科大学(現長崎大学医学部)で放射線(レントゲン)の研究と治療をした医学博士で、白血病と診断され、その年の8月に被爆し、大怪我を負いながらも、負傷した人々の救護活動を行った人物だ。

如己堂は浦上の人々が博士のために建てた、たたみ2畳ほどの小さな家だ。ここに私は、浦上の人々の如己愛人の精神が表れていると感じた。如己愛人には『己の如く隣人を愛せよ』という意味がある。ここで博士は寝たきりになりながらも、亡くなるまで、原子爆弾による病気の研究や絵・詩などたくさんの本を書いて世界平和を願い、訴え続けた。

私は博士の行動力に感動し、自分で考え、責任を持って行動できる人間になりたいと思った。そして、一人ひとりが平和のために何ができるのか考え、実行していかなければならないと思う。

(2) 長崎原爆資料館

『黒焦げとなった少年』この写真を見たとき私は愕然とした。うまく表現することができないが、原子爆弾の恐ろしさを感じたからだと思う。

私はこの写真のことが忘れられず、後日この写真について調べてみると、当時中学1年生だった少年の可能性があるということが分かった。もしもその話が本当ならば、自分たちと年の近い少年の命が一瞬にして奪われたということだ。

この少年だけでなく、大勢の人々の命が原子爆弾によって奪われたのだ。原子爆弾だけでなく、人の命を奪うようなものが存在してはいけなと強く感じた。

(3) 平和祈念式典

8月9日、原子爆弾が長崎に投下された日に行われる平和祈念式典。その本会場である平和公園に私はいた。長崎市長の平和宣言の中に、「被爆者が、心と体の痛みに耐えながら体験を語ってくれるのは、人類の一員として、私たちの未来を守るために、懸命に伝えようと決意しているからです。」という一文があり、私はその言葉が心に残った。

戦後72年が経ち、被爆者の方々の平均年齢は81歳を超えた。戦争を経験していない人たちのほうが多くなった。原子爆弾や核兵器の恐ろしさを詳しく知らない私たちは、被爆者の方々が経験を伝えてくださっていることをしっかりと受け止め、次の世代に伝え続けていかなければならない。

原爆が投下された11時2分、式典の参列者全員で黙とうを行った。静寂に包まれたこの時間の中で、私は戦争の起こらない日が来ること



< 青少年ピースフォーラム >

を祈った。

式典の行われた平和公園には、世界各国から贈られたモニュメントや平和の泉、平和の鐘などがある。これらを見て私は、この公園には世界や長崎の人々の平和への強い思いがたくさん詰まっているのだと感じた。

3 心に残った風景

この写真は、青少年ピースフォーラムの最終日に参加者で撮った思い出の写真だ。

この青少年ピースフォーラムでは、2日間にわたり、全国各地から集まった学生と一緒に、原爆の実相について、フィールドワークや、原爆を経験した人から話を聞き、紙芝居によって学び、平和について意見交換をして考えた。また、沖縄の学生と同じグループになり、米軍基地の話なども少し聞くことができた。福島にはない環境に戦争というものを身近に感じた。

4 研修を振り返って

私はこの研修に参加し、4日間で、原子爆弾の与える被害の大きさや影響、恐ろしさなどを学ぶことができた。

原子爆弾の投下された土地に実際に行き、当時の長崎の様子などを体験した人から直接聞くことは、戦争を経験した人たちが少なくなってきた中で、戦争の記憶を忘れないために、次の世代に伝えていくために、とても大切なことだと思った。また、私自身も、この平和な日々が当たり前だと思わず、一日一日に感謝して生活していきたい。

私は、この研修に参加し、今まで以上に平和について考えるようになった。私の考える平和な世界は、武力を使わなくてもみんなが笑顔で安心して生活できる世界だ。一人でも多くの人に戦争や平和について考えてもらえるよう、今回学んだことを地域や学校の友達などに伝えていきたい。

核兵器廃絶への願い



郡山市立富田中学校2年 中 島 英 大

1 はじめに

たった一発の原子爆弾。それは、一瞬にして長崎の街を地獄へと変えた。72年前の8月9日、午前11時2分。多くの生活、笑顔、大切な人達を奪った原爆が落とされた。僕は、「原子力の恐ろしさ」を身近に感じられたことが、この長崎派遣へ行くきっかけとなった。原子力発電所の事故だ。これによって、いつまでも消えない恐ろしさ、放射線の被害を受けた人々がかかえる多くの苦しみ。だからこそ、真実は何なのかを知る必要があると思い、長崎派遣で「原子力の力」の恐ろしさを学びたいと考えた。

2 研修の実際

(1) 青少年ピースフォーラム

僕は、戦争の恐ろしさを実際に体験した、深堀讓治さんから、お話を聞いた。

当時14歳の深堀さんは、疎開していて、爆心地から3.3kmのところまで学徒報国隊として働いていた。そして11時2分。ピンク色の光とまっ赤な雲が上がり、その瞬間、爆風に襲われたという。

僕は、核兵器の起こした真実に、戦争というものに怒りがわいた。たとえ敵国だとしても、無関係で、平和な生活をしていた人々の尊い命をこんな恐ろしい兵器の実験台にしたとするならば、許せないと思った。また、深堀さんのお話は、今まで気づけなかった大切なことを気づかせてくれた。それは、深堀さんが、「平凡な生活。朝起きて陽を浴びて、平凡な日々を過ごす。あたりまえのことだが、これが僕にとっての幸せだ。」と言った言葉からだ。学校へ行き、

友達と話をし、家に帰る。僕は、その全てがあたりまえだと勘違いしていた。深堀さんは、「あたりまえの事は、あたりまえではないと全てに感謝をしている。」という。だから、僕もその心を忘れずに、毎日を過ごしたいと思う。

(2) 原爆資料館

この資料館には、原爆の恐ろしさを感じさせる物が多く展示されていた。中でも「泡だった瓦」に目が釘付けになった。こんなに硬い物質を一瞬で沸騰させる程の巨大な熱が、その瞬間、大地に広がったということだ。人も、一瞬で血液や体内の水分が沸騰し亡くなったとあった。

原爆の模型「ファットマン」(長崎に落とされた原爆の名前)も展示してあった。高さ3m位で幅が1m~2m位の大きさの爆弾なのに、1万mまで届く威力を持っていると思うと本当に恐ろしい。人々の心、体、平和に傷をつける核兵器は、僕は这个世界から無くなってほしいと心から願う。



< 原子爆弾落下中心地碑 >

3 心に残った風景

この写真は、「原子爆弾落下中心地碑」だ。この近くにあった物や人は全て一瞬で灰となった。この慰霊碑の周りには、折り鶴がたくさんある。折り鶴は、「平和」そのもののように思える。あの時、爆心地に居た人達は、3,000℃から4,000℃の熱に包み込まれ、苦しいと思う間もなく灰になっていった。人類がこのような被害を受けたのは初めてのことだと思う。その恐ろしさも同時に物語っている慰霊碑だと思った。

4 研修を振り返って

この長崎派遣事業に参加し、今生きていることが幸せだということ、戦争への憎しみ、人々の核兵器廃絶の願いなど、多くのことを学ぶことができた。

派遣から帰ってきてから、友達のおばあさんの話を聞く機会があり、郡山市でも戦争の被害があったと聞いて驚いた。昭和20年4月12日にあった郡山空襲のことだ。駅近くの化学工場を狙い、B-29が波のように爆弾を投下していったという。当時4歳だった友達のおばあさんは、雨戸の隙間から、駅のあたり全てが真っ赤に燃えているのを八山田の家から見たそうだ。死者は460名。そして犠牲になった人の多くが、市民や学生だったとのことだった。

僕自身、あたりまえの日常が、あたりまえではないんだなと改めて感じる事ができた。72年前の終戦から、大変な思いをした人々が、今の平和で幸せなこの世の中を作ってくれていることに感謝したい。そして、僕が感じたように、同世代の人にも戦争体験を聞いてもらい、「平和」というのは、僕達が今後守っていかなくてはならないと感じて欲しいと思った。

世界の平和を願って



郡山市立大槻中学校2年 樽川 瑛 李

1 はじめに

私は、かつて戦争や紛争が起きたこと、原爆が広島や長崎に落とされたことを知っていた。しかし、戦争があったこと、原爆が落とされたことによってどのようなことが起きたのかをよく知らなかった。ニュースや本で戦争について関心を持ち、自分に出来ることは何かと考え、長崎派遣事業に参加した。

2 研修の実際

(1) 原爆資料館

11時2分を指したまま止まっている時計、原爆投下により被害を受けた建物や死者・負傷者の写真など、目を覆いたくなるような資料がたくさん展示してあった。その中で一番衝撃を受けたものは、原爆による被害だ。熱線によって溶けて人間の骨と一緒にくっついている鉄帽子、爆風によって崩れ落ちた家々、生き残ったとしても放射線や火傷で苦しめられる人達の写真だ。被害を受けた人達は、決して治すことのできない傷が心に付けられただろう。その写真を見て、もうこのようなことや被害者を出してはいけなさと感じたと同時に、改めて原爆の恐ろしさを痛感した。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、被爆者が自らの原爆体験について語っていた。戦争によって家族を失い、心に深い傷を負ったという。二度と帰って来ない家族。自分に置き換えてみると、耐えられない現実だ。被爆者の方は涙も出なかったそう。私はどうだろうか。考えるだけで苦しくなる。また、この話を聞いて、テレビや本では分からない原爆が起こした無残さ、

生々しい現実、原爆の恐ろしさを直接感じる事ができた。

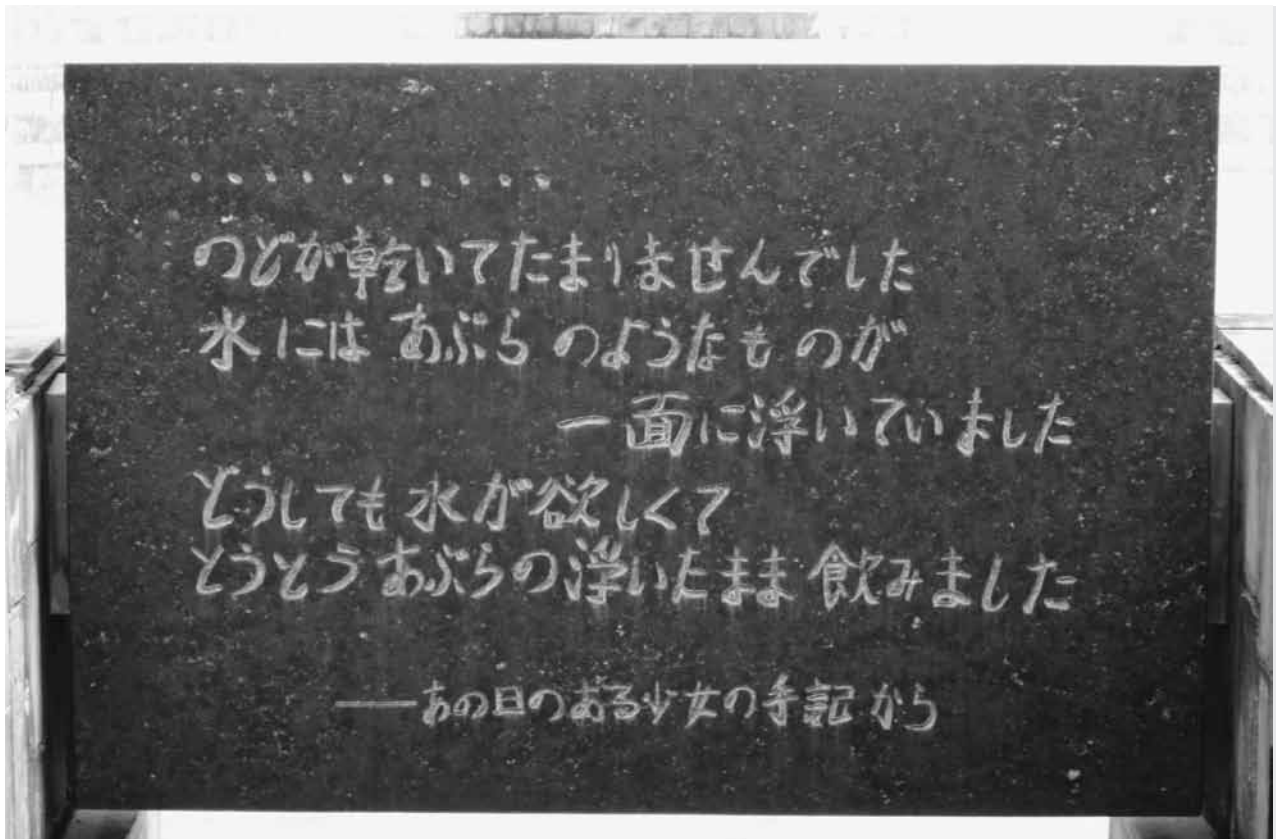
その他にも原爆に関する資料をたくさん見ることができた。国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の入口には水槽があり、約7万個のライトが設置してあった。知らずに「綺麗なライトだな」と思ったが、それは原爆による犠牲者の数だと知り、とても心が痛み悲しくなった。もう72年前のような過ちは起こさず、一日でも早く戦争や核兵器の存在しない平和が訪れてほしいと心から思う。

(3) 平和祈念式典

式典は長崎ブリックホールでの参列となった。長崎市長の「長崎平和宣言」を聞いて、言葉では表せない気持ちになった。それと同時に、1945年8月9日午前11時2分に長崎に原爆が落とされたことを、絶対に忘れてはいけないと思った。世界で唯一の被爆国として、原子爆弾の完全廃絶を訴えていかなければいけない。

『ノーモア ヒバクシャ』この言葉は、未来に向けて、世界中の誰も、永久に、核兵器による惨禍を体験することがないように、という被爆者の心からの願いを表したものです」

これは、長崎市長の平和宣言の一部だ。過去にあったことは取り消すことはできない。だが、未来に起こることは、私達で阻止することができる。未来を動かしていくのは、私達だ。そのことを忘れずに、「世界を平和にするために」への取り組みを、今の私ができることを精一杯していきたいと思う。



< 平和の泉 >

3 心に残った風景

上の写真は、平和公園の「平和の泉」である。原爆で苦しんだ人々は水を求めて亡くなったという。喉の渇きはつらいもの、しかしそれは通常であり、私には原爆の後の渇きは想像がつかない。私よりも小さなたくさん子ども達がこのような体験をしたかと思うと心が痛くなり、戦争とは悲惨さ・苦しさだけを残すものだと感じた。もう二度とこのような出来事が起きなければよい、また絶対に起こしてはいけないと心から祈った。

4 研修を振り返って

私は今回、長崎派遣事業への参加の機会をいただいた。両親も祖父母も戦争経験はもちろんなく、身近に戦争について語ってくれる人もいない。学校やメディアを通して、漠然と「戦争はダメなもの、あってはならないもの」と知っていたが、特別思い入れがあったわけでもなかった。

長崎で私が見たあの衝撃的な写真の数々・防空壕・人骨、原爆で崩壊した建物、被爆者の方々の生々しい体験談。私の中で、今までの自分の考えや思いは一変した。どれだけ自分の置かれている今が平和な世の中なのだろうとも感じた。そして同時に憲法9条についても考えた。まだ憲法について勉強はしていないが、長崎から帰ってきてから自分なりに調べてみた。調べてみて私は、この9条があるからこそ72年間戦争がない世の中が守られてきたのかなと感じた。

私達はまだ14年しか生きていない。14歳だから何もできないと思う。しかし、私がこの長崎派遣事業で感じた命の尊さ、戦争や原爆がもたらした悲劇・悲惨・被害、そして二度と戦争を起こしてはいけないという気持ちを、強く思った。その時抱いた気持ちを忘れず、これから先、広島や長崎に起きた出来事を、私達が後世に強く訴えていかなければならないと感じた。

「平和」とは何か



郡山市立小原田中学校2年 佐藤 悠

1 はじめに

1945年、広島と長崎に原子爆弾が投下された。また、2011年、福島原子力発電所で、爆発事故が発生した。

この2つの出来事の共通点として、「放射線」というワードが挙げられる。私はこれまで放射線というものは、「危険なもの」という事と、広島、長崎に落とされた原子爆弾から放出された事しか分からなかったし、興味もなかった。しかし、去年の平和祈念式典のニュースを見て、原子爆弾の被害の1つである放射線の影響で、今もなお苦しんでいる人がたくさんいるという事を知った。それから私は放射線について興味を持つようになった。そして、

- 放射線とは人体にどのような影響を及ぼすのか。
- なぜこの戦争に、原子爆弾が使われたのか。と疑問に思った。

そんなときにこの派遣事業の話が来て、この疑問を解決しようと思い、この事業に希望した。

2 研修の実際

(1) 永井隆記念館

ここでは、白血病という病に侵されながらも、原子爆弾の被害を受けた人たちの救援活動をしたり、病が進行して体が動かなくなっても、唯一動く手を使って6年間で17冊もの平和に関する本を書いたり、47歳で亡くなるまで平和について訴え続けた永井隆博士の生涯を、詳しく調べることができた。

記念館には、博士の著書や遺書、写真なども展示してあった。調べていくにつれ、博士は、ある信念に基づいて生きていたことが分

かった。それは、「己の如く人を愛せよ」である。これは、「如己堂」の名前の由来となった言葉で、「自分と同じように他人も大切にしろ」という意味である。この信念に基づいて生きてきたから救援活動を誰よりも早く、またたくさんの方の平和に関する本を残すことができたのだと思う。

私は、博士のような平和を願いながら亡くなっていった人たちのためにも、私たちの世代が平和について訴え続けなければならないと思う。

(2) 原爆資料館

ここには私の想像の範囲を超える物ばかりが揃っていた。展示されているものの中には、全く原形を留めていない物や、持ち主が分からない物、性別さえも分からない人の写真まであって、当時の生々しさがそのまま残っていた。

私が一番印象に残ったのは、手の骨が張り付いている岩である。これは原子爆弾が爆発した時に生じる熱線で、肉が溶けて骨が岩に張り付いてしまったものだそうだ。「たった一発で、ここまでなるものなのか。」私は、最初から最後までそう思いながら見学した。しかも、今の核兵器は当時の100倍近い威力を出すことができるのだから、広島や長崎の時よりも甚大な被害が出るはずだ。この様な悲劇を繰り返さないためにも、より強く核兵器廃絶を呼び掛けていくことが大切だと思う。

(3) 平和祈念式典

8月9日午前11時2分。私は長崎ブリックホールで黙とうを捧げていた。そこには人の話し声など全く聞こえない。聞こえてくるのは鐘の音だけだった。

私が一番印象に残ったのは、世界で唯一の被



< 平和の噴水 >

爆者だけの合唱団が歌った「もう二度と」という歌の、「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」という歌詞である。この歌には、被爆者の人たちの思いがたくさんつづられていた。

その場で聞いてきた私たちには、この歌の歌詞やこの歌につづられている思いなどを、周りの人に伝えていく義務があると思う。

3 心に残った風景

この写真は、平和公園の中にある「平和の泉」である。なぜここに泉があるのか最初はわからなかった。しかしこれには、ちゃんとした理由があった。

それは、今からさかのぼること72年前、長崎に原子爆弾が落とされた時、この辺りには水を求めてさまよう人がたくさんいたそうだ。その人たちは口々に、「水、水をくれ。」と、苦しそうに言っていたのだそうだ。なのでここに泉を作り、亡くなった人たちに水を捧げているの

だそうだ。

蛇口をひねれば水が出る。今私たちが行っていることも戦争中は満足にできなかった。当たり前のことが当たり前でなくなるというのはどういう事なのかを知ってほしくて、この写真を選んだ。

4 研修を振り返って

私はこの研修を通して、「平和」とはということかという事を深く学ぶことができた。平和の定義は人それぞれで、「世界から戦争がなくなる」という人もいれば、「何気ない日常生活を生きる事のできる」という人もいる。

私は、平和というのは、国民一人ひとりが平和について考え、それを他の人と共有していくことで成り立つものだと思う。それを実現するためには、物事を武力で解決するのではなく、話し合いをすることが大切だと思う。そのための一歩として、国民一人ひとりが平和への理解を深めることが大切だと思う。

「世界平和」への願い



郡山市立西田中学校2年 伊藤 菜緒

1 はじめに

1945年8月9日午前11時2分、長崎に一発の原子爆弾が投下された。多くの人が亡くなり、今なお後遺症に苦しんでいる人がいる。この事実を、私たち中学生は、どのように認識しているだろうか。「教科書に載ってるよね。アメリカってひどいよね。」その程度ではないだろうか。当然、原爆を経験した唯一の国に育つ者としての責任まで考えたことのある人は、ほとんどいないだろう。

社会科の学習で、爆発している原子爆弾、直後の町の風景を実際の映像で見る機会があった。とても直視できるような映像ではなかったが、目をそらさずに最後まで見た。すると、実際に長崎に行って学びたい、自分の家族や仲間たちに長崎の地で起こったことを伝えたいという気持ちが心の中にわいてきた。間もなくして、先生から長崎派遣の話聞いた。希望者について聞かれたとき、自然と手が上がった。

2 研修の実際

初めて訪れた長崎は、原爆が落とされたとは思えないぐらい活気にあふれていた。長崎に住むたくさんの人々の復興への強い思いを感じた。

(1) 如己堂・永井隆記念館

如己堂は、自分自身もけがを負う中、人命を最優先に医療活動にあたった永井隆博士への感謝の思いを込めて建てられたお堂である。博士は、自身の病気で寝たきりになった後も、原爆の悲惨さを伝えるために17冊もの本を書いた。それで得たお金も、全て学校や教会への寄付や桜の植樹に使われたという。私は、長崎に来て、

初めて永井博士のことを知った。是非、世界中の人々に発信していきたいと思った。

(2) 青少年ピースフォーラム

8月8日、9日の2日間にわたり開かれた青少年ピースフォーラムでは、深堀讓治さんによる被爆体験の話が印象に残っている。家族の遺体は真っ黒に焦げ、本当に家族なのかも見分けがつかなかったそうだ。深堀さんは、思い出すこともつらいこの出来事について、細部まで詳しく話してくれた。聞いている私もつらく、涙がこぼれそうになった。同時に、原子爆弾の投下とはどのようなことなのか、語り継いでいく必要性を強く感じた。昨年も、どこかの国で原子爆弾の爆破実験が行われたと聞いている。長崎で起こったことを世界に伝えることは、原子爆弾の拡散のブレーキになるのではと思った。

(3) 平和祈念式典

初めて参列した式典には、世界各地からたくさんの平和を祈る人たちが参列していた。

式典の最初に歌われた被爆者の方々による「もう二度と」の合唱は忘れられない。歌詞に「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」というフレーズがあり、何度も繰り返し歌っていた。被爆者の方々の強い願いが伝わってきた。11時2分になると、平和の鐘が鳴り響く中、参列者全員で黙祷をささげた。私は「この世から戦争がなくなりますように」と心の中で何度も唱えながら黙祷した。

式典では、たくさんの人々の平和への想いに触れた。参列しなければ感じられなかったこの想いを、是非、福島に帰って伝えたいと思う。



＜ 平和を祈る鶴の数 ＞

3 心に残った風景

上部の写真は、平和公園に奉納されていた千羽鶴の写真だ。私は、カメラに収まりきれない数の千羽鶴にとっても驚かされた。何万羽という色とりどりの鶴のすべてが、長崎を想いながら折られたものだと思うと、多くの悲しみと平和への祈りが伝わってきて、心が震えた。千羽は難しいが、私も鶴を折ってみたいと思った。十羽や百羽になってしまうかもしれないが、長崎を想い鶴を折るという行為そのものが、その気持ちが大切なのだと思う。是非、友達にも声をかけて挑戦してみたい。

また、平和公園には、日本人だけでなく、外国人の方々もたくさん訪れていた。平和公園に来ているということは、単に観光に来たというわけではないだろう。きっと、少しでも、原子爆弾の投下の現実と、それによって心を痛めた長崎の人々の気持ちを理解しようとして来たのだと思う。中には、アメリカ人の姿もあった。悲しんでいるような表情が見えた。その悲しみがどこに向かっているのかは分からなかったが、世界中の人々も、悲しみを持って、長崎への原爆投下のことを考えてくれていることが嬉しかった。

4 研修を振り返って

72年前、原子爆弾が広島、そして長崎に落とされた。そして、多くの市民が犠牲になった。実際に長崎の地を訪れ、被爆者の話や多くの写真、祈りをささげる世界中の人々を見てきたことで、「絶対に忘れてはいけない」という想いはさらに強くなった。平和は当たり前のことではない。社会科の授業で、第二次世界大戦の後、世界から戦争がなくなったことはない聞いた。それは、罪のない人が今も大勢亡くなっていることである。小さな子どもも武器を持って戦っているらしい。もちろん、今、この瞬間もだ。日本はたしかに平和だ。でも、それが当たり前だと思っはいけない。この平和をずっと続けるためにも、今回の長崎派遣で学んだことを、発信し続けようと思う。そして、その想いが世界中に届いて、すべての悲しみがなくなった日が、本当の平和の日になると思う。そんな日が必ずやってくると、私は信じた。

最後に。4日間笑顔で過ごせたのは、友達や支えてくださったスタッフの方々のおかげだ。初めての九州で不安だった気持ちを、見事に消し去ってくれた。長崎派遣で出会えたすべての人に心から感謝したい。

戦争のない平和な世界をつくるために



郡山市立宮城中学校2年 伊藤 碧人

1 はじめに

僕は戦争について、ましてや広島や長崎については、自分にはあまり関わりがないと思っていた。だが、戦争時、広島・長崎は原爆投下により放射線の被害を受けたと知って、福島県も原発事故で放射線の被害を受けたため、関係ないとはいえないと思った。僕自身、ホールボディカウンターで甲状腺の検査があり、被爆というものを身近に感じた。72年前長崎に原爆がもたらした被害や、核兵器、戦争について知りたいと思い、この長崎派遣事業に参加した。

2 研修の実際

(1) 原爆資料館

そこでは、原爆が落とされた当時の様子が展示されていた。それはまるで、当時の生活とは切り離された別世界に来たような感じがした。

スロープを降りていくと、まず11時2分止まった柱時計が目に入った。それを見た瞬間、原爆の恐ろしさを知った。柱時計が一瞬で、元の形が崩れてしまっていたからだ。そのくらい爆弾の熱風の力は強いのだと思った。そして、自分がそれを受けたらと思うと、鳥肌がたった。それから、被爆後の長崎や、黒こげになった遺体の写真。それらが当時の長崎の状況を物語っていた。

そして、長崎に実際に落とされた原爆「ファットマン」の模型を見た。長さ約3m、直径約1mのこの爆弾が、一人一つしかない多くの命を奪ったのだ。長崎という大きな町を一瞬で何もない町に破壊してしまったのだ。ここでは、「戦争の悲惨さ」「核兵器の恐ろしさ」「命の尊さ」を知った。戦争の実際に一歩近づけたと思った。

(2) 平和祈念式典

式典では、被爆者の方々による合唱が行われた。歌詞が自分の心に深く刺さった。この歌から悲しみと戦争のつらさが伝わってきた。そして、11時2分、平和の鐘が鳴り響くと同時に黙祷を捧げた。世界の平和のために。戦争は人々を苦しめ、悲しみを与えるだけだと思った。その後、長崎市長が平和宣言を行った。「もし自分の家族がそこにいたら、と考えてみてください。」という言葉と黒こげの遺体の写真が重なり、戦争はあってはならない、後悔と絶望しか残らないと改めて感じた。

(3) 青少年ピースフォーラム

1日目は、14歳で被爆した深堀さんの話を聞いた。被爆後の長崎が、火の海になったと聞いて、原子爆弾の破壊規模はとて大きかったのだと思った。そして、自分と同じ年頃で、母親と弟2人と妹、一瞬で大切なものを4つも失うととても辛い経験をした。自分だったら耐えられないとも思った。核兵器でこのような経験をした人が大勢いたことを思うと、平和な世界を作っていくためにも核兵器は廃絶する必要があると思った。

2日目は、「平和なとき」と「平和でないとき」について、班で意見を出した。僕たちは学校での「平和」についてまとめた。「平和でないとき」の意見を見ると、「けんかしているところを見たとき」や「友達を傷つけてしまったとき」と、身近な場所でも平和でないときがあるので、常に相手を思いやるのが大切だと思った。そして、僕は、ある目標を立てた。「自分のためではなく相手のことも考え、みんなのためになることをする」それを心にとめて、周りの人たちを大切にし、生活したい。



＜一本柱鳥居＞

3 心に残った風景

心に残った風景は、一本柱鳥居である。二本柱で支えられていた鳥居は、72年前の原爆で柱が一本だけになってしまったが、今も力強く立ち続けている。写真ではなく自分の目で初めて確かめ、「これが原子爆弾の威力か」と強い印象を受けた。当時の事を語る人が減少する中で、これは72年もの間ずっと原爆と戦争の恐ろしさを伝えてくれている。鳥居の柱が一本だけになるくらいの大きな力を持っている核兵器の被害を人間が受けたらと思うと、核兵器の恐ろしさを感じた。この一本柱鳥居は「核兵器と戦争はあってはならない」というメッセージを伝えていると思った。身近に原爆の悲惨さを伝えてくれる一本柱鳥居は、これからもあってほしいと思った。

4 研修を振り返って

この研修を通して、原子爆弾の恐ろしさ、戦争の悲惨さ、命の大切さをより深く知ることができた。原子爆弾が一瞬にして命を奪った出来事は、これからもこの先に伝えていく必要がある。世界で唯一の被爆国である日本の国民は、これを決して忘れてはならない。実際に長崎へ行き、研修で学んだことは、戦争を知らないまさに自分たちの世代の人に伝えていかなければならないことだと思う。

核兵器は世界の平和には必要がない。核兵器廃絶が平和への第一歩だと思う。

ピースフォーラムで学校の平和のためにできることを考えた。この活動を生かして、身近な場所を平和にできるようにしたい。

また、今まで当たり前で生きていたことが普通だと思っていたが、家族に、友達に感謝し、一つしかない命を大切に、生活していきたいと思った。

平和への願い



郡山市立御館中学校2年 渡邊知紗

1 はじめに

私は、戦争について詳しく知らなかった。原子爆弾についても、落とされたときの被害は放射線の影響がほとんどだと思っていた。東日本大震災の後でも、「放射線」という言葉を使っていたが、「放射線」がどんな被害をもたらすのかは、詳しく知らなかった。だから、この機会を知ろうと思い、この研修に参加しようと思った。

もう一つの理由もある。それは、戦争体験者が高齢になったが、私たち、今の若い世代は戦争のつらさを全く知らない。だから、私が戦争体験者から当時の話を聞き、近くの友だちにそれを伝えることで、戦争のつらさを知ってほしい。そして、もう怖い思いをしないようにするにはどうすればいいか一緒に考えていこうと思ひ、この研修に参加した。

2 研修の実際

私は長崎に行く前に、戦争後の長崎について調べた。その中で、家が一軒もなく、がれきしかない長崎の風景が出てきた。その景色を見て、「長崎には戦争の面影がまだまだ残っている。」と勝手に想像していた。しかし、実際に見た景色は緑豊かで、家も沢山建っていて、「戦争が無かったのでは」と思うほどに復興していた。

(1) 永井隆記念館

記念館には、永井隆博士が残した平和へのメッセージが沢山あった。この研修に参加する前は、永井隆博士の名前を聞いたことも無く、博士のことを何も知らなかった。しかし、永井隆記念館で、博士が書いた「平和を」という色紙や本などを見て、「博士は、沢山の資料で違

う世代の私たちに戦争のつらさを教えているんだな」と思った。永井隆博士は、日本だけでなく世界中の平和も望んでいるのだと思った。その願いのこもった本が72年経った現在でも読み続けられている。私たちはこの本をこれからも大切に読み伝えていかなければならない。

(2) 平和祈念式典

私は今回、平和祈念式典に参列した。平和祈念式典の中で、被爆者の方々による合唱「もう二度と」が披露された。この歌の「聞こえていますか 被爆者の声が あなたの耳に聞こえていますか もう二度と作らないで わたしたち被爆者を あの青い空さえ 悲しみの色」という1番の歌詞を聴き、亡くなられた方の家族の思いが書かれているのだと思った。その気持ちは、戦争を体験していない私たちも同じだった。

その後、全員で黙祷をした。私は、「私もしその場にいたら、必死に逃げていただろう。もちろん被害にも遭っていたのだろう。被害にあった方々の中には、一瞬で亡くなってしまった方もいただろう。どういう思いで亡くなったのか。その方々の思いも込めて、戦争が無くなり、世界中が平和になりますように。」と願った。

(3) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、平和会館に全国の小中高生が集まり、意見交換を行った。

1日目は、戦争当時の話を聞いたり、フィールドワークで爆心からわずか500mの地点にある城山小学校を展望台から見たり、被爆して死亡し振り袖姿で火葬された「振袖の少女」の銅像を見たりした。展望台から見る長崎は、とても自然豊かだった。

2日目は、班ごとに、「自分が思う平和でない時」を話し合った。そこで、第一に周りの人々



< 平和祈念像 >

を大切にすることが平和につながるのだと学んだ。この青少年ピースフォーラムで学んできたことを、友達にも伝えていきたい。

3 心に残った風景

私は、平和祈念像が1番心に残った。

この平和祈念像は、神の愛と仏の慈悲を象徴し、垂直に高くあげた右手は原爆の脅威を、水平に伸ばした左手は平和を、横にした足は原爆落下直後の長崎市の静けさを、立てた足は救った命を表し、軽く閉じた目は原爆犠牲者の冥福を祈っているようだ。

私はこの銅像を初めて見た時、思っていた大きさよりも大きく、とても驚いた。それと同時に、大きさだけでなく、平和の尊さも伝わってきた。この像をぜひ、世界中の人々に知ってほしいと思った。この銅像とともに、平和を願っていきたい。

4 研修を振り返って

私は、小学生までは戦争など興味がなく、「戦争なんて私には関係ない。」と思っていた。しかし、最近ニュースで話題になっている「ミサイル」という文字を見るようになってから、「ミサイルがきっかけで戦争が始まってしまったらどうしよう。」と思うようになった。

原爆が落とされて72年経った。もう二度と戦争を起こさないためにはどうすればいいか、まだ思いつかない。しかし、この研修に参加して、全国の方々と平和について語り合うことができた。

自分の周りでも、これから、友達とどうすればいいかを話し合っていく、少しでも平和になっていくよう、努力していきたい。今回学んだことを忘れずに、次の世代へと伝え続けていきたい。

平和の大切さ



郡山ザベリオ学園中学校2年 石川 琳 久

1 はじめに

1945年8月9日その日11時2分、長崎に1発の原子爆弾が投下された。多くの大切な命、平和な日常、町の風景なども一瞬にして奪われてしまった。

そこで僕は、原子爆弾投下後の長崎の様子やどのようにして復興したのか知りたいと思った。また、長崎の今の姿を自分の目で確かめたいという思いもあった。

平和の大切さ、核兵器の恐ろしさをたくさんの人に伝えていきたいと思い、この長崎派遣事業への参加を決めた。

2 研修の実際

僕は初めて長崎を訪れた。そこには海と緑に囲まれた自然豊かな美しい景色が広がっていた。ここに原子爆弾が投下されたとは思えなかった。

(1) 原爆資料館

入口は原子爆弾が投下された1945年にタイムスリップするような作りになっていて、スロープをぬけると、そこはさっきまで自分がいた世界とは全く違う世界のように感じた。

原爆資料館には、僕の想像を絶するもので原子爆弾の恐ろしさを物語る様々な展示品があった。僕の心に残ったのは、11時2分で針が止まっている時計である。まさにその時、たくさんの方の命が原子爆弾によって奪われたと思うとぞっとした。

そして、僕は改めて原子爆弾の恐ろしさを知ることができた。

(2) 青少年ピースフォーラム

8月8日～9日の2日間、日本各地の小学生

から社会人が集まり、原子爆弾の恐ろしさ、平和の尊さなどについて学んだ。また、被爆体験をした深堀譲治さんのお話を聞くことができた。

話を聞いて印象に残った言葉がある。それは、「原爆が投下された時、空には真っ赤な雲、真っ黒な雲があった。」という言葉である。

僕は、空に真っ赤な雲、真っ黒な雲があったら怖くて動けないと思った。また、深堀さんの暗い顔を見て、平和のため何かできないかと思った。

(3) 平和祈念式典

平和祈念式典において、世界で唯一の被爆者合唱団「ひまわり」が合唱した「もう二度と」の曲の中に「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」という歌詞があった。これが今でも忘れられない一番心に響いた歌詞である。原爆の被害を実際に受けた「ひまわり」の方々だが、それでも平和のために前を見続けてきた力強さが感じられた。

11時2分。平和の鐘が鳴り響いた。全員で黙とうを捧げた。72年前のこの時間、1発の原子爆弾で7万4千人が命を落とし、生き残った人も放射線などで次々と亡くなった。今もまだ苦しんでいる人は多くいる。そう思うと悲しくなり、もう二度と戦争はしてはいけない、核兵器のない平和な世界を作っていかなければならないと感じた。



< 如己堂 (によこどう) >

3 心に残った風景

この写真は、被爆し大けがを負ったものの、負傷した人々の救護活動を行った永井隆博士が、被爆後生活していた家だ。たたみ2畳ほどの小さな家である。如己堂の名前の意味は、カトリック聖書の中の教え「己の如く隣人を愛せよ」(自分を愛するように、まわりの人を愛しましょう) からきている。博士は寝たまま、原子爆弾による病気の研究や著者活動をしていた。著書は17冊にも及び、これらを読む人々に原子爆弾の恐ろしさや戦争のおろかさ、「命」と「平和」の大切さを訴えてきた。

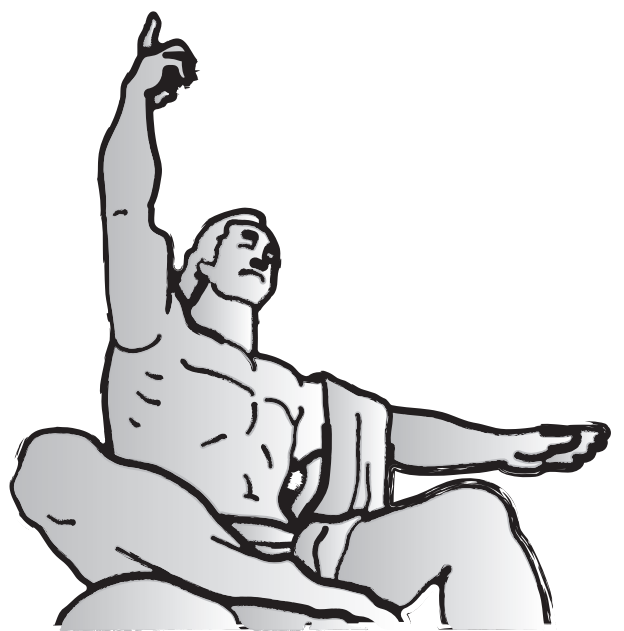
僕は、博士からのメッセージを読んで、胸がいっぱいになった。どこまでも「命」を大切に、戦争のない世界を願い続けた力強さを感じた。これからは、僕たちがこのメッセージを伝えていかなければならない。そう思えた風景だった。

4 研修を振り返って

今回の長崎派遣事業に参加して、原子爆弾の恐ろしさや命と平和の大切さなど、たくさんのことを学ぶことができた。72年前、1発の原子爆弾がたくさんのものを奪った。このことを決して忘れてはいけない、繰り返してはいけないと思った。核兵器がある限り世界は平和になれないと思う。しかし、日本はアメリカの核の傘によって安全が守られているという現実がある。無責任な「空気」に流されず、自分の意見を持ち、違う意見にも耳を傾け、議論することが大切だと思う。

平和を祈り続けて72年、戦争への関心が薄れていく今だからこそ、現地で戦争のことを学んできた僕たちが家族や学校の人、地元の人に、戦争の悲惨さ、平和へのメッセージを伝えていかなければならないと強く思った。

最後に、この長崎派遣事業に参加して本当によかったと思った。この経験は僕にとって、最高の財産になった。



平成29年度 郡山市中學生長崎派遣事業
「2017 ナガサキへのメッセージ」報告書

発行日 平成29年11月24日
発行者 郡山市・平和を考える市民の集い実行委員会
(事務局：郡山市総務部総務法務課)

〒963-8601 郡山市朝日一丁目23番7号
電話：024-924-2031
FAX：024-924-0956
Eメール：soumhoumu@city.koriyama.fukushima.jp

印刷 郡山市総務部総務法務課

